

仙台市文化財調査報告書第175集

宮城県仙台市

洞雲寺遺跡



1993.3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第175集

宮城県仙台市

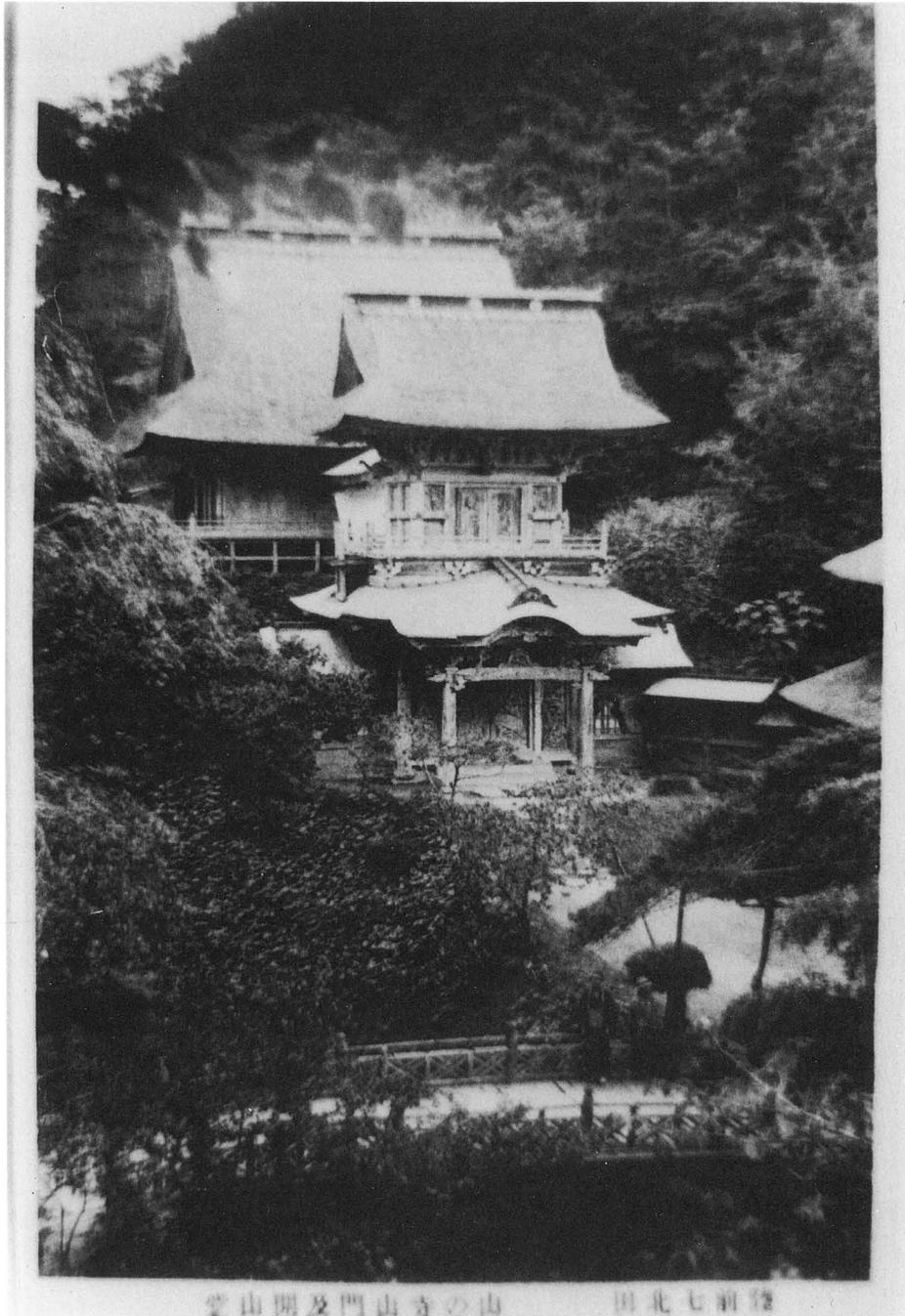
洞雲寺遺跡



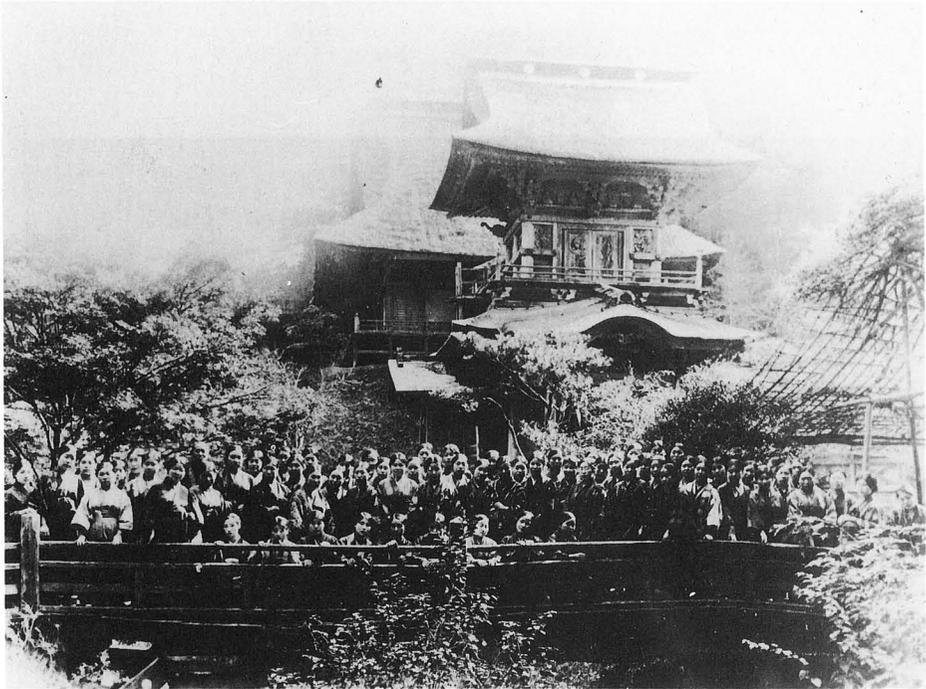
1993.3

仙台市教育委員会

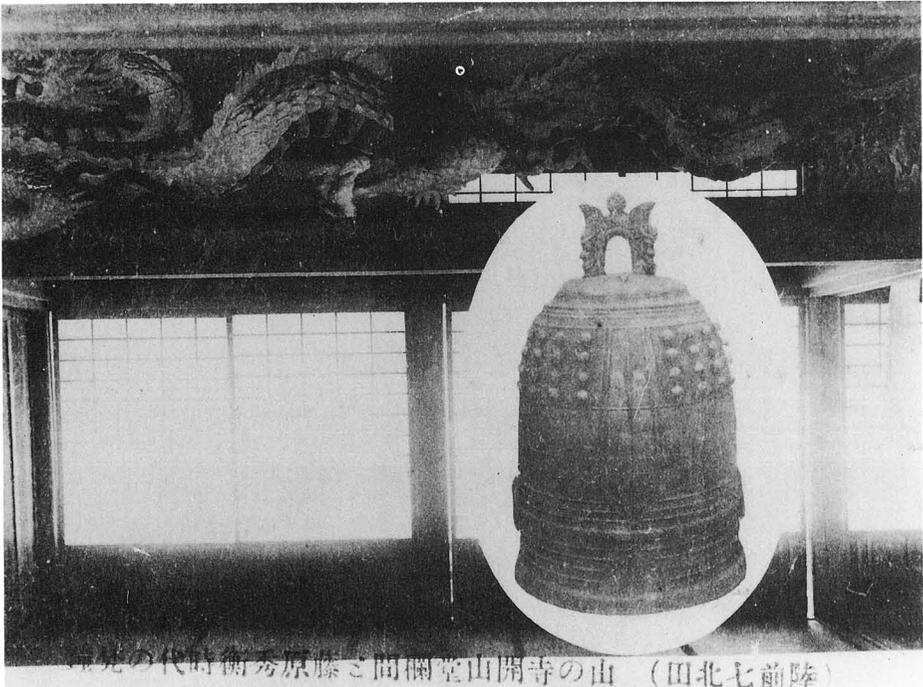
表紙の写真は山の寺洞雲寺所蔵の銅鐘の龍頭である。またバックの文字は銘文から図案化したものである。



卷頭図版1 山門と開山堂 (昭和初期)



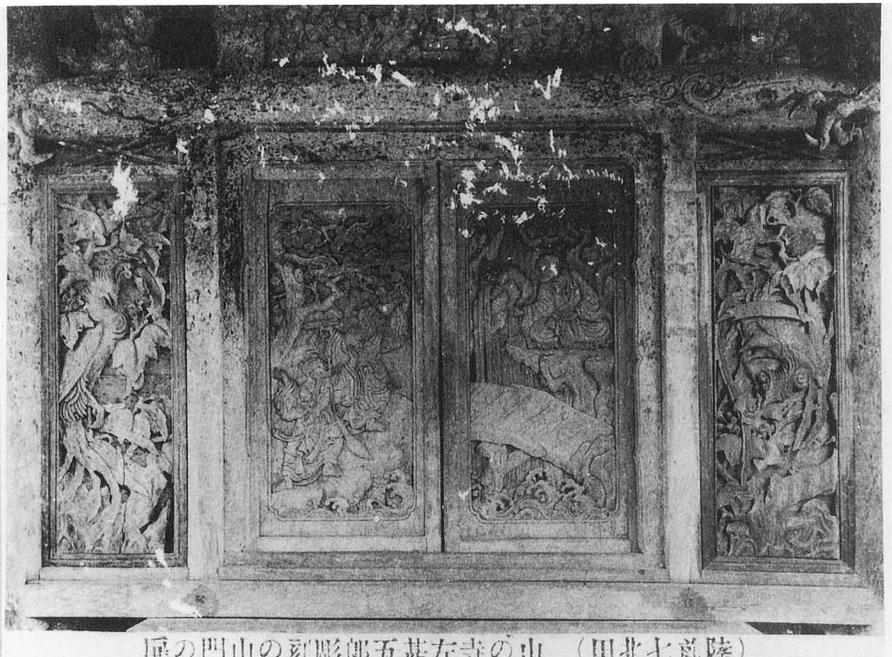
巻頭図版 2 山門と開山堂



巻頭図版 3 開山堂の内部



巻頭図版 4
山門
(裏に開山堂の正面が見える)



扉の門山の刻彫郎五甚左寺の山 (田北七畠陸)

巻頭図版 5 山門の扉

卷頭図版の写真は山の寺洞雲寺で所蔵している。

序 文

日頃、仙台市教育委員会の文化財保護行政に対しまして多大な御協力をいただき、感謝申し上げます。

仙台市は、平成元年4月に政令都市に移行してから5年目を迎え、都市整備の充実が急務となってきました。こうした中で、各種の開発に伴う遺跡の発掘調査件数も増加する傾向にあり、先人たちの歴史と文化が次第に解明されてきております。

さて、本書は曹洞宗山の寺洞雲寺の本堂増築ならびに、位牌堂、客殿新築に伴って実施した洞雲寺遺跡の発掘調査報告書であります。山の寺洞雲寺は、宮城県内最古の銘文を有する銅鐘を所蔵（宮城県文化財指定）しており、古くから名刹として知られています。この調査では、江戸時代中期に建てられた開山堂の礎石や山門の石積みなどが発見され、近世寺院の建築のあり方を考える上で大きな成果が得られました。この調査成果が今後の研究の一助になれば幸いです。

当市教育委員会には、先人たちの創造した歴史と文化遺産を市民の宝とし、次の世代に継承し、活用していく責務が課せられています。しかしこうした文化財の保護活用は、市民の方々の御支援があってこそはじめて成果が上げられるものと考えております。今後とも市民の皆様方の御支援と御協力をよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、多大な御協力を寄せて下さった山の寺洞雲寺と発掘調査に参加していただいた方々、ならびに報告書作成にあたり御指導と御助言をくださいました関係各位に心から感謝を申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

平成5年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

例 言

1. 本書は、位牌堂ならび客殿増築に関わる洞雲寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書中の土色については「新版標準土色帳」（小山・佐原：1973）を使用した。
3. 本書の作成・編集は、長島榮一・稲葉俊一が行なった。
4. 図中および本文中の方位は北（N）は、すべて真北である。
5. 本書使用の地図は、国土地理院発行の5万の1「仙台北東部」である。
6. 本書において特に断りのない出土遺物・実測図・写真等の資料は、仙台市教育委員会で一括保管している。
7. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

SA	柱列跡他塀跡	SE	井戸跡	SX	その他の遺構
SB	建物跡	SI	竪穴住居跡・竪穴遺構	P	ピット・小柱穴
SD	溝跡	SK	土坑		
8. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

A	縄文土器	D	土師器(ロクロ使用)	G	平瓦・軒平瓦
B	弥生土器	E	須恵器	P	土製品
C	土師器(ロクロ不使用)	F	丸瓦・軒丸瓦	N	金属製品
9. 山の寺洞雲寺で所蔵している写真、銅版画の掲載については、住職千田幹雄氏の御厚意による。
10. 昭和14年に仙台高等工業学校の作成した建物の平面図類の掲載については、東北大学工学部助教授飯淵康一氏の御厚意による。
11. 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々から助言、指導をたまわった。記して謝したい。（敬称は略させていただく。）

東北大学名誉教授 佐藤 巧、東北大学助教授 飯淵康一、東北大学教授 菊地正嘉、
仙台市博物館
12. 出土遺物中の石材の鑑定については、仙台市教育委員会所蔵の石材サンプルとの対照による。
13. 陶器、磁器の年代観等は当市文化財課 佐藤 洋氏による。

本文目次

序文	
例言	
調査要項	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 調査の方法	3
IV 開山堂跡・山門跡・昇階段跡の調査	4
1 基本層位	4
2 検出遺構	6
3 出土遺物	13
V 庫裏東方平場の調査	22
1 基本層位	22
2 検出遺構	23
3 出土遺物	29
VI 仏殿跡・庫裏北方平場の調査（平成3年度の調査）	31
VII まとめ	33

調 査 要 項

遺 跡 名：洞雲寺遺跡

遺跡所在地：仙台市泉区山の寺二丁目3-1

調 査 期 間：平成4年4月28日～7月10日

調 査 面 積：491m²（開山堂跡275m²、山門跡・昇階段跡15.5m²、庫裏東方平場45.5m²、仏殿跡75m²、庫裏北方平場80m²）

調 査 主 体：仙台市教育委員会

調 査 担 当：仙台市教育委員会文化財課

調査第一係 主事 長島榮一・教諭 稲葉俊一（平成4年度）

調査第一係 主任 熊谷幹男（平成3年度）

調査参加者：大内節子、菅家婦美子、熊谷きぬ子、熊谷キミ子、佐々木匡、佐藤悦子、佐藤紀子、塩野礼子、高橋嘉子、竹村美智子、田中つや子、松浦せい子、村本茂子、渡辺まき子（泉区寺岡）、渡辺まき子（富谷町）

整理参加者：赤井沢千代子、小佐野章子、菅家婦美子、菅井百合子、永田英明、日比野園子、洞口れい子、増田瑞枝、吉田りつ子

調 査 協 力：山の寺洞雲寺

I. 調査に至る経過

山の寺洞雲寺は、寺の整備事業の一環として本殿の増築、位牌堂、客殿、渡り廊下の新築などを計画している。

仙台市教育委員会では、平成3年7月から12月にかけて予定地である仏殿東側部分、庫裏北方平場、開山堂跡について試掘予備調査を行った。その結果、仏殿東側部分で遺構は確認できなかったが、庫裏北方平場では土坑、ピットなどを検出した。また、昭和18年に焼失した開山堂跡からは礎石が当時のまま残存していることを確認し、周辺には平場や築山を有する池などが観察された。このように寺の縁起にあるような由緒ある大寺院を彷彿させる様相であったため、山の寺洞雲寺と当市教育委員会では保存について協議したが、開山堂跡の礎石や地下遺構が損なわれることが判明したため、事前に発掘調査を実施した次第である。

II. 遺構の位置と環境

位置と自然環境

調査した山の寺洞雲寺は洞雲寺遺跡に含まれ、仙台市中心部から北へ約10kmのところにある。遺跡の西側には国道4号線（仙台バイパス）が南北に走っており、周辺には住宅地が広がっている。

洞雲寺遺跡が所在する仙台市泉区は、奥羽山脈の一角を占める泉ヶ岳(1172m)を北西端とし、北西から南東にかけて尾根状に広がる区で、面積は、145.47km²である。区を縦断するのが七北田川で泉ヶ岳等に源を発し、宮城野区岩切を通り仙台湾に注いでいる。泉区内の川沿いには段丘面が発達し、洞雲寺遺跡は仙台市内の台ノ原段丘に相当する中位段丘上に立地している。遺跡の中にある寺の境内は、標高25～80mの比高差のある谷部に位置し、中央を沢が西へ向かって流れている。谷の最深部には、戦後再建された本堂と庫裏が建っている。

周辺の遺跡と歴史的環境

洞雲寺遺跡周辺には、南西3km程に縄文時代の遺跡として知られる高柳遺跡や沼遺跡が位置している。また、中・近世の遺跡も多く、南西方向には松森城跡や国指定史跡である岩切城跡がある。さらに留守氏の菩提寺である東光寺には、中世の石窟仏や板碑が数多く残されている。西方8km程には堂庭廃寺跡が、北西10km程には信楽寺跡が位置している。

山の寺洞雲寺は、仏殿、仁王門、開山堂、山門、庫裏が整う名刹として知られていたが、昭和18年の山火事で諸堂一切が焼失した。焼失した建物は、昭和14年に仙台高等工業学校建築科教授小倉強氏等の調査結果により、江戸時代中期享保年間から寛政年間に至る建築物であったことが確認されている(註1)。特に山門は、翼廊の付いた塔状の二重門で、随所に動物や植物



番号	遺跡名	年代	番号	遺跡名	年代
1	洞雲寺遺跡	縄文晩・中世・近世	16	安楽寺遺跡	古代・中世
2	長命館遺跡	中世	17	内館遺跡	中世
3	沼遺跡	縄文・古代	18	山王遺跡	古墳・古代・中世
4	高柳遺跡	縄文中・古代・中世	19	山地田遺跡	中世
5	松森城跡	中世	20	多賀城跡	古代・中世
6	館遺跡	古代・中世	21	穴薬師磨崖仏	中世
7	松森焔硝藏跡	縄文・古代	22	菅谷横穴古墳群	古墳・古代・中世
8	岩切城跡	中世	23	利府城跡	古代・中世
9	①東光寺遺跡	中世	24	堂庭庵寺跡	古代
	②東光寺石窟仏	中世	25	信楽寺跡	中世
	③東光寺古碑群	中世	26	堂屋館跡	中世
10	地藏堂古碑群	中世	27	門前城跡	中世
11	若宮前遺跡	縄文・古墳・古代・中世・近世	28	鶴巢館跡	中世
12	今市遺跡	古代・中世	29	下草古城跡	中世
13	鴻ノ巣遺跡	古墳・古代・中世・近世	30	日光山遺跡	中世・近世
14	洞ノ口遺跡	古代・中世	31	大崎窯跡	中世
15	洞ノ口古碑群	中世	32	加茂神社	

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

などの立体的彫刻が施れており、諸堂の中でも特色のある建物であった。

これらの建物は、享保年間仙台輪王寺衲菴和尚が、伊達藩主伊達吉村の援助と一般の寄付を募り建てられたもので、完成までには衲菴、円梁、円長と三代の住職にわたり整備されたものである（第1表）。

洞雲寺についての伝承を記したものは、仙台藩の儒臣田辺希文による封内風土記（安永元年・1772）があるが、その元となった記述は境内に残る重興洞雲禪寺碑（延保4年・1747年建立）によるものである。それによれば、寺の開基は慶雲年間（奈良時代）定恵に始まるとされ、平安時代には慈覚大師が中興開山して「砂山寺」と称したという（註2）。暦応年間には領主国分盛胤が明峰素哲禪師を招請し、その時天台宗から曹洞宗に転じたと言う。その後、応永年間に領主国分盛行の援助を受けた梅国祥三が、堂塔を新営したと言われている。しかし、火災を受けて寺は衰退したとされている。江戸時代以前の寺の存在を示すものとしては、永正15年（1518）の銘とともに龍門山洞雲禪寺の名が記された銅鐘（宮城県指定文化財）がある。銘文を有す梵鐘としては、県内最古の物である。

江戸時代享保年間以降、再建された建物の年代は次のように伝えられている（註3）。なお建物の配置についてはP45 図版14を参照していただきたい。

・仏殿	： 延享2年9月19日上棟	(1745)	仏殿上棟棟札
・仁王門	： 明和9年	(1772)	寺の記録
・開山堂	： 安永4年	(1775)	寺の記録
・山門	： 天明元年11月吉日上棟	(1781)	山門上棟棟札
・庫裏	： 寛政3年	(1791)	寺の記録

建物の完成（第1表）

Ⅲ. 調査の方法

平成4年度の調査は平成4年4月28日に開始し、開山堂跡、山門跡、昇階段跡、庫裏東方平場の3ヶ所の調査を実施した。

開山堂跡は、平成3年度の試掘調査で検出した礎石周辺の竹の根を除去し、発掘調査を行った。その結果、礎石に関わる根石、据え方を検出した他、平場の構造を明らかにするための下層調査を実施した。山門跡、昇階段跡では、表土を排除すると山門跡に関わる礎石や石積みを検出した。上段の開山堂の建っていた平場の構造を明らかにするため、昇階段跡でも斜面において下層調査を実施した。

庫裏東方平場では、昭和25年以降の盛土の撤去を行い、江戸時代の庫裏が建てられていた第Ⅲ層上面、それ以前の第Ⅳ層上面での遺構の検出作業を行った。第Ⅵ層上面では、土坑、ピットが検出されている。この他に平成3年度において、本堂の増築に伴う仏殿跡の調査と、庫裏北方平場の発掘調査を実施している。

IV. 開山堂跡・山門跡・昇階段跡の調査

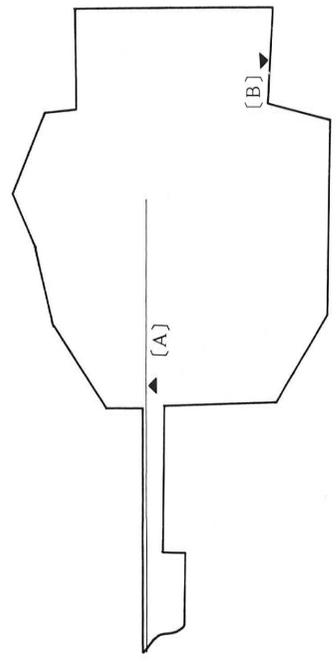
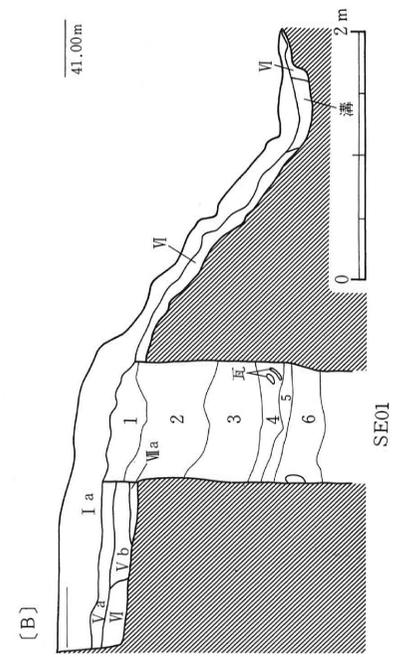
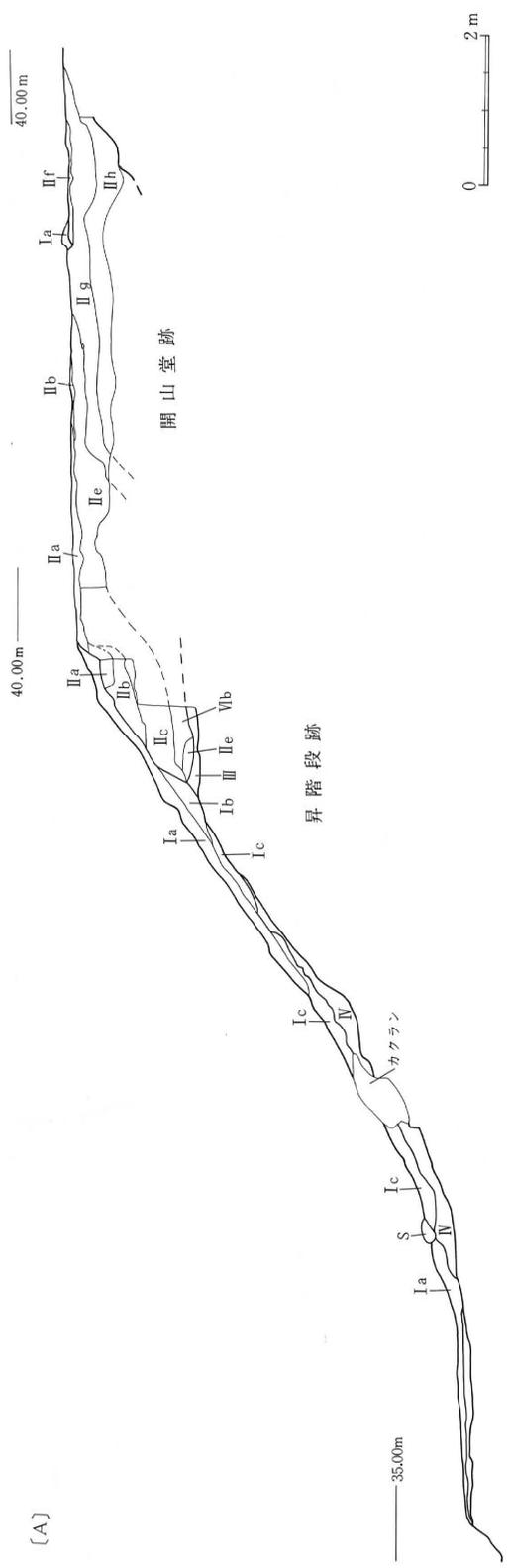
1 基本層位

調査地は、3段の平場とそれらを結ぶ斜面からなっている。1段目の平場は山門のあった箇所
所で標高34mである。周辺を削り取られており、原地形を留めていない。2段目の平場は開山
堂のあった箇所で、標高39.2m～39.4mである。山門と開山堂を結ぶ斜面が昇階段であった箇
所である。3段目は調査地の東奥の平場で、標高39.5m～40.6mである。

平成3年の試掘調査で、調査地内の刈り払いをしたところ、2段目の平場上に礎石が残存し
ていた。礎石の間に竹の根が数多く張っていた。第2図中の開山堂部分のII a層上面には、I
a層が5cm程堆積していた。

- I a層 10Y R4/3にぶい黄褐、シルト。竹の根が多い。現在の表土。
- I b層 10Y R4/6褐色、シルト。上部からの崩落。
- I c層 10Y R6/6明黄褐色、砂。炭化物を多量に含む。上部からの崩落。
- II a層 10Y R5/6黄褐色、シルト質粘土。礫を多量に含む。
- II b層 10Y R5/4にぶい黄褐色、シルト質粘土。砂岩片を多量に含む。
- II c層 10Y R5/4にぶい黄褐色、シルト質粘土。風化した基盤岩と礫を多量に含む。
- II d層 10Y R4/4褐色、シルト質粘土。風化した基盤岩と礫を多量に含む。
- II e層 10Y R5/4にぶい黄褐色、シルト質粘土。褐色シルトをブロック状に含み、酸化鉄、
炭化物を少量含む。
- II f層 5 Y8/6黄色、砂。
- II g層 10Y R4/3にぶい黄褐色、粘土。礫片を含む。
- II h層 10Y R3/2黒褐色、粘土質シルト。
- III 層 10Y R4/4褐色、シルト。風化した基盤岩と礫を多量に含む。旧表土。
- IV 層 10Y R4/4褐色、シルト。開山堂構築以後の上部からの崩落土。
- V 層 2.5Y R6/3にぶい黄色、粘土質シルト。開山堂構築以前の古い上部からの崩落土。
この層はさらに細分される。
- VI 層 10Y R5/4にぶい黄褐色、砂。
- VII a層 2.5Y7/4浅い黄色、基盤岩。
- VII b層 2.5Y7/3浅黄色、砂。

以上のようにI層からVII層までに大別される。I層は現在の表土である。II層は開山堂の構
築に伴う平場の造成土で、積み手の違いにより細分される。III層は平場の造成される以前の旧



第2図 調査区断面図



第3図 開山堂跡平面土層模式図

表土である。IV層は開山堂構築後に上部から崩落した土の層である。V層は開山堂構築以前に上部から崩落した土の層で、谷状の地形を埋めているようである。VI、VII層はこの周辺の基盤岩となっている層である。

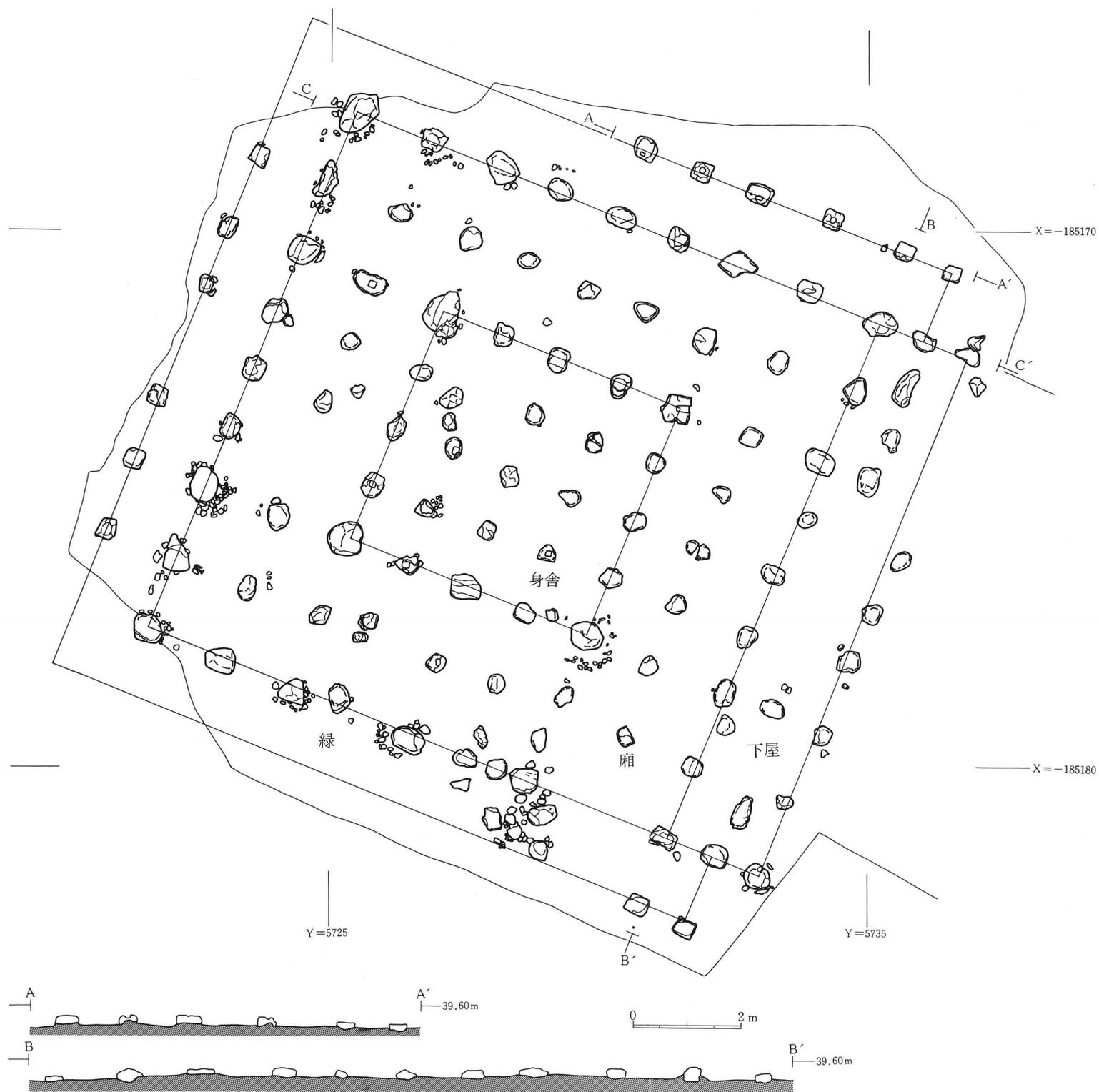
2 検出遺構

II、V、VII層の上面で礎石建物跡1棟、土坑2基、井戸跡1基、ピット2などを検出した。巻頭図版のように礎石建物跡については、昭和18年まで同地に建っていた開山堂跡であることが明らかのため、文中では開山堂跡と記述する。

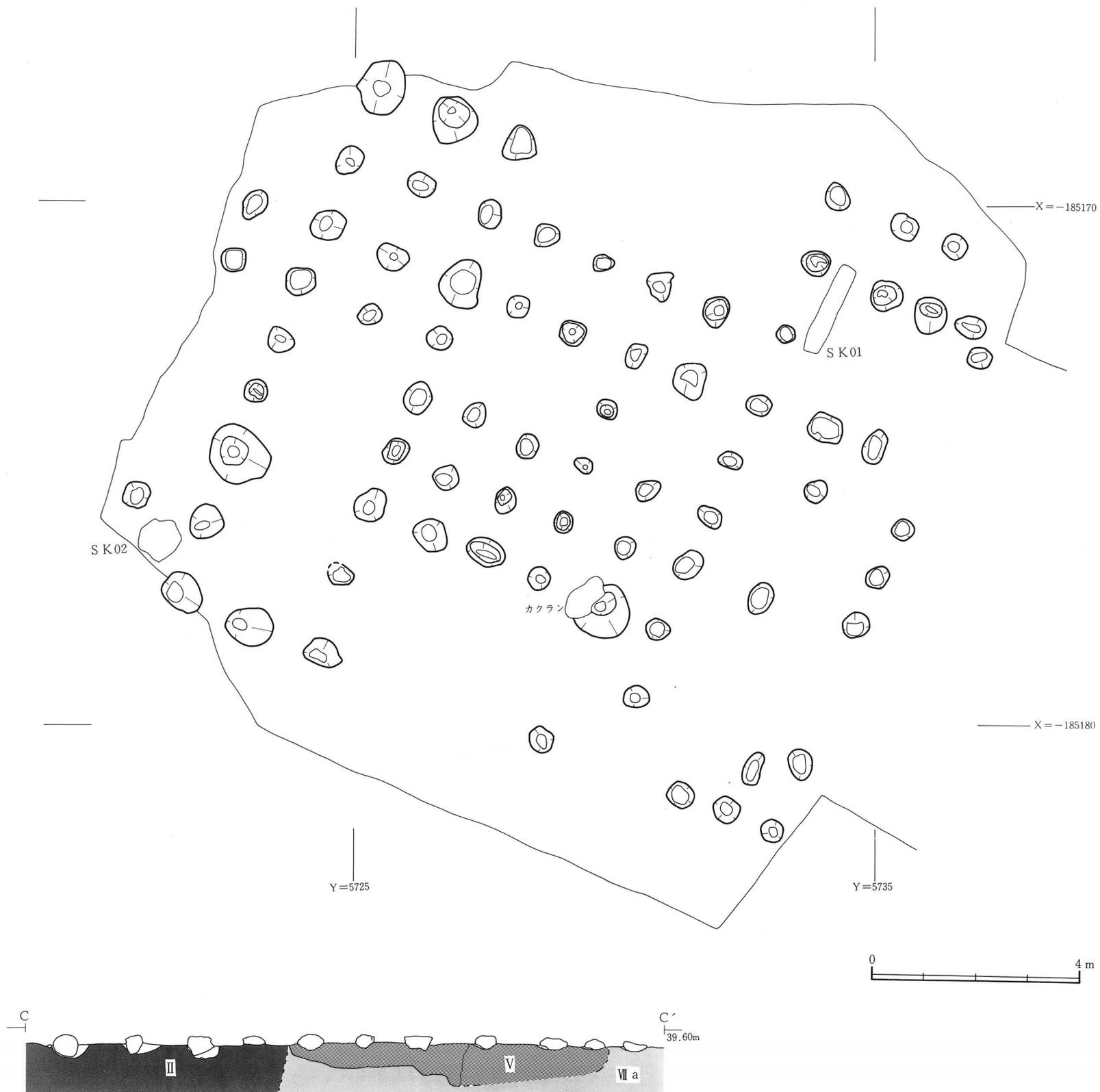
開山堂跡

開山堂跡は仏殿や山門跡よりは1段高い平場の上に位置し、平場の東半は山の斜面を削り、西半は礫を多量に含むシルト質粘土などを積み上げて造成している。礎石の配置関係から、焼失後に平場の北西隅と南西隅が崩れたと考えられる。

礎石は120個検出され、根石や据え方との位置関係から、101個は建設された当時の位置を保っていると考えられる。建物規模は東西11間、総長13.6m、南北10間、総長12.9mで、方向はN-22°-Eである。礎石の配列・規模から4間×4間の身舎に2間分の廂がつき、その外側の西、



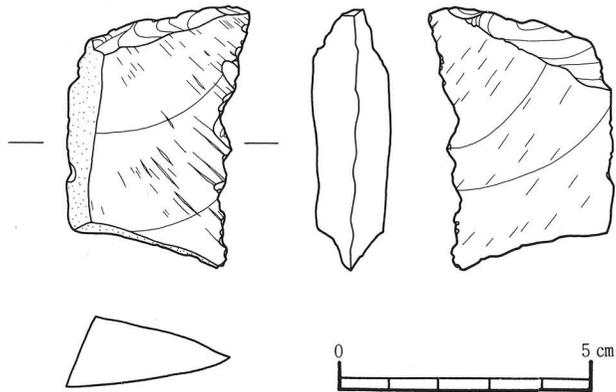
第4図 開山堂跡平断面図(1)



第5図 開山堂跡平・断面図(2)

南、北面に1間分の縁、東面には2間分の下屋が巡っていたと考えられる。柱間寸法は身舎112.5~117.5cm、廂135cm、下屋で90cmである。礎石は火熱のため表面が欠落しているものが多い。礎石のうち6個(N4W3、N6W4、N7W3、N7W7、N8W5、N9W6)には、一辺が13cm方形の角柱痕跡が残っている。礎石の規模はばらつきがあり、身舎、廂で15~40cmの不整形、縁で16~25cmの方形、下屋で15~37cmの不整形である。N4W8の礎石には、楔で割られた痕跡がある。N1W6~W9の縁の礎石にはほぞ穴状の穴があり、他の石造物からの転用の可能性がある。

礎石の下部には根石が敷かれ、一部には径17~60cm、深さ2~17cmの据え方を伴っている。根石の中には、墨書痕跡があるものが9点発見されている。根石はすべて河原石である。

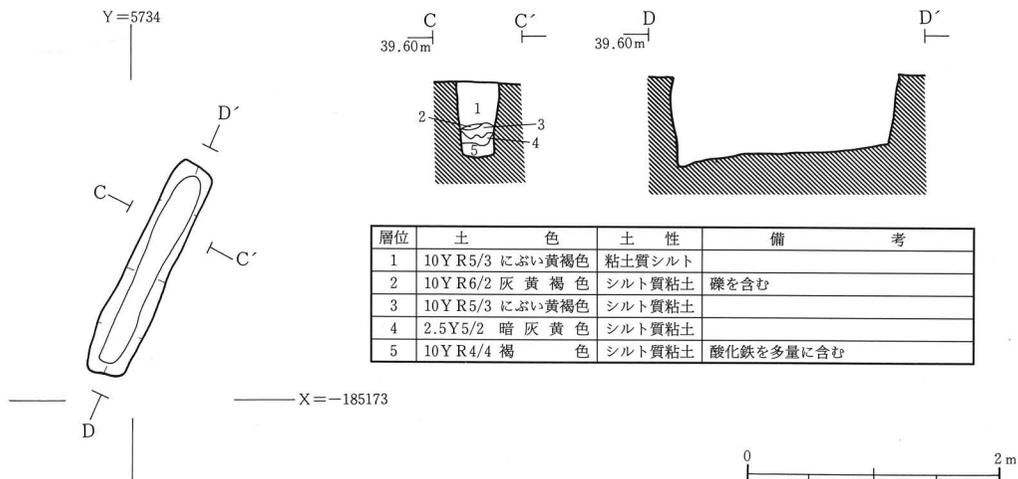


登録番号	器種	石材	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	写真図版
k-3	スクレイパー	安山岩	23.0	52.0	33.0	15.0	13-14

第6図 SK01土坑出土遺物

SK01土坑

長軸180cm、短軸35cmの隅丸方形で、深さ56~70cmである。長軸方向は、N-26°-Eである。堆積土は4層からなり、最下層中より石器K-3スクレイパー(第6図)を出土している。土坑の形状より落とし穴と考えられる。



層位	土色	土性	備考
1	10Y R5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
2	10Y R6/2 灰黄褐色	シルト質粘土	礫を含む
3	10Y R5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	
4	2.5Y5/2 暗灰黄色	シルト質粘土	
5	10Y R4/4 褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む

第7図 SK01土坑平・断面図

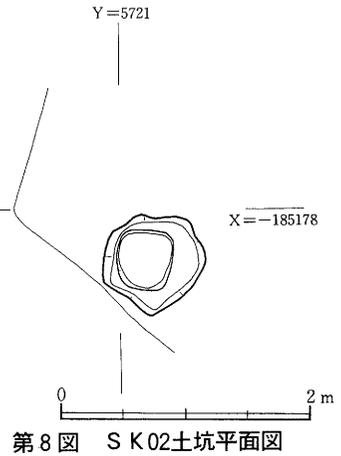
S K 02土坑

77cm×78cmの不整形で、深さは28cmである。堆積土は1層でG-5 塀瓦（第13図4）が出土している。

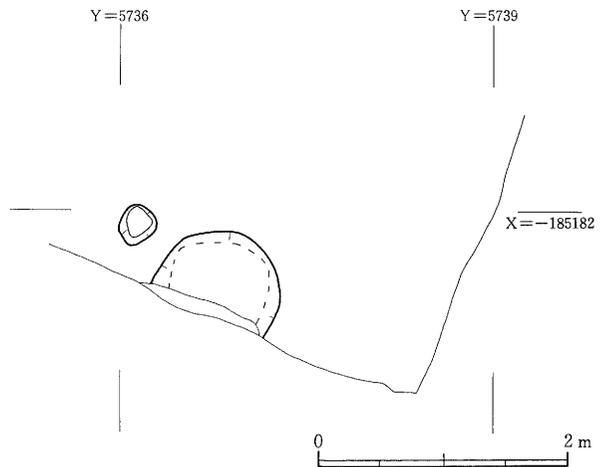
S E 01井戸跡

最上段の平場から、井戸跡を検出している。100cm×70cm以上の円形で、深さ200cm以上の素掘りの井戸跡である。堆積土は6層で、第4層中よりF-2、3、丸瓦（第15図9、第14図1）が出土している。崩落の危険があるため完掘できなかった。

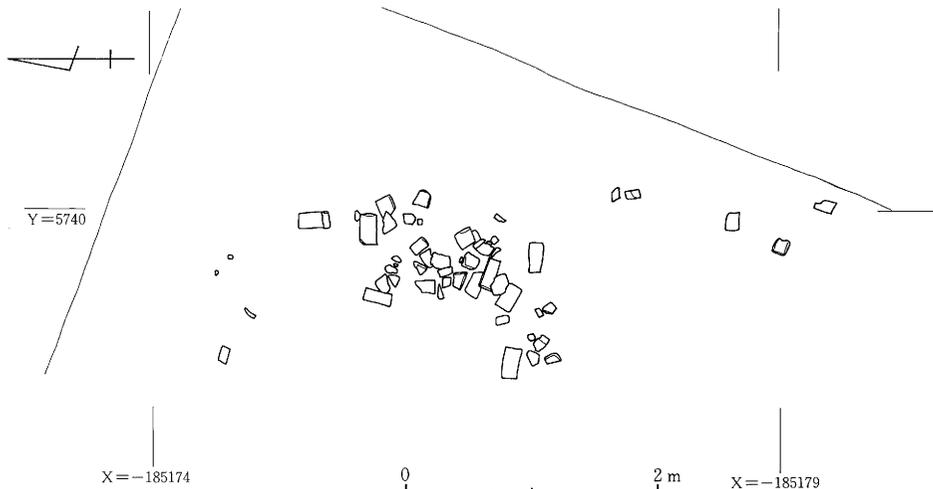
S E 01井戸跡の北側で、瓦がまとまって出土している（第10図）。瓦は熨斗瓦と平瓦の2種類で、炭化物と混じり合って出土し、調査以前から一部は、表土上に散見していた。全体の器形が明らかなのは、熨斗瓦でG-3、6、7、8、10、11、19（第12図10、9、8、7、5、4、11）の7点、平瓦でG-12（第13図3）、G-13（第12図12）の2点である。出土状況から昭和18年の開山堂焼失時に集積した可能性がある。



第8図 S K 02土坑平面図



第9図 S E 01井戸跡平面図



第10図 開山堂上方平場瓦出土状況平面図

山門跡

昇階段と取り付く箇所、凝灰岩の切石が3段に積み重なって検出された。それらの石積みの前面には礎石が4個と切石が1個検出されている。礎石のうち径6.5cm、深さ3.5cmのほぞ穴のあいたものがあった（第30図参照）。発掘調査した範囲が狭いのと、山門焼失後に周辺の地形が削平されていることから、遺構の詳細については明らかにできなかった。

昇階段跡

炭化物の集積を一部で検出したのみで、遺構は発見されなかった。

3 出土遺物

出土した遺物は、瓦、陶磁器片、飾り金具や古銭などの金属製品、墨書痕跡のある根石、土師器質土器、土製品、石器などである。

a. 瓦

瓦は、開山堂跡と上方の平場、S E 01井戸跡から出土している。全て燻瓦である。

平瓦

G-12は開山堂跡より上方の平場、G-13、18は開山堂跡周辺から出土している。

G-12（第13図3）凸面の剝離が著しいが、入念なナデ調整が施されている。凹面もナデ調整が著しいが、凸面よりも粗い。

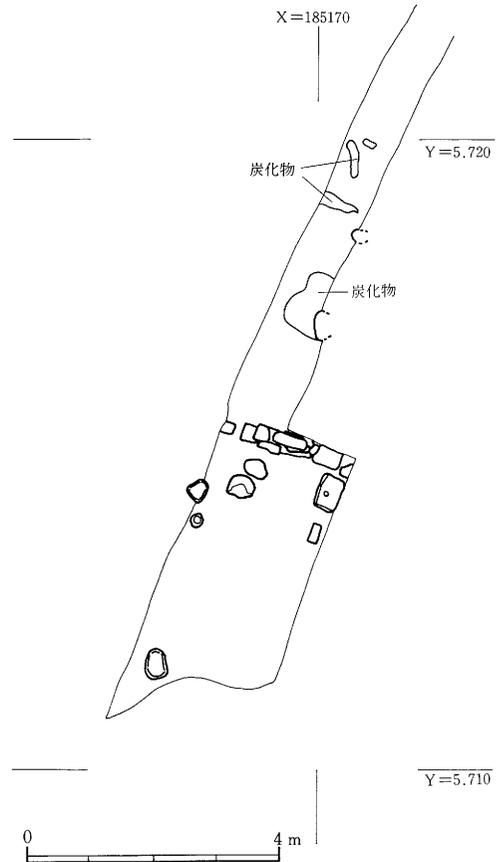
G-13（第12図12）凸面が粗いナデ調整、凹面は入念なナデ調整が施されている。凹面に錆びた鉄片が付着している。G-12より平坦である。

G-18（第13図1）凸面が粗いナデ調整、凹面は入念なナデ調整が施されている。焼成以前に直径1.1cmの穴が穿たれている。

丸瓦

F-1は、開山堂跡、F-2、3は、S E 01井戸跡から出土している。

F-1（第14図2）玉縁の付く有段丸瓦で、凸面は縦方向のナデ調整が施され、玉縁付近で横方向のナデ調整がさらに施されている。㊦の刻印がある。凹面は布目と縄の押圧痕跡が見られる。凹面の端は面取りされている。



第11図 山門跡・昇階段跡平面図

F-2 (第15図9) 凸面は縦方向のナデ調整が施され、凹面は布目痕とヘラによる強い削りが施されている。凹面の端は面取りされている。

F-3 (第14図1) 玉縁の付く有段丸瓦で、凸面は縦方向のナデ調整が施され、玉縁付近で横方向のナデ調整がさらに施されている。刻印があるが、破損のため判読できない。凹面は布目と縄の押圧痕跡が見られる。凹面の端は面取りされている。

熨斗瓦

G-3、6～8、10、11は開山堂跡より上方の平場、G-9、15～17、19は開山堂跡周辺から出土している。

G-3、7、19 (第12図10、8、11)

平瓦に分割線を入れ、分割してから焼成されるもので、分割した面に調整は加えられない。凹、凸面とも粗いナデ調整が施されている。

G-6、11、16、17 (第12図9、7、4、2、1)

平瓦に分割線を入れ、分割してから焼成されるもので、分割した面に調整は加えられない。凹面は入念なナデ調整が施され、凸面は粗いナデ調整が施されている。

G-9、10、15 (第12図6、5、3)

端部が面取りされ焼成されるもので、分割線は観察されない。凹面は入念なナデ調整が施され、凸面は粗いナデ調整が施されている。

軒棧瓦

開山堂跡周辺から出土しているが、残存状況が良好ではなく、器形を復元できるものはなかった。

G-4、14、20、21 (第15図5～8) 巴文と唐草文の組み合わせのものである。

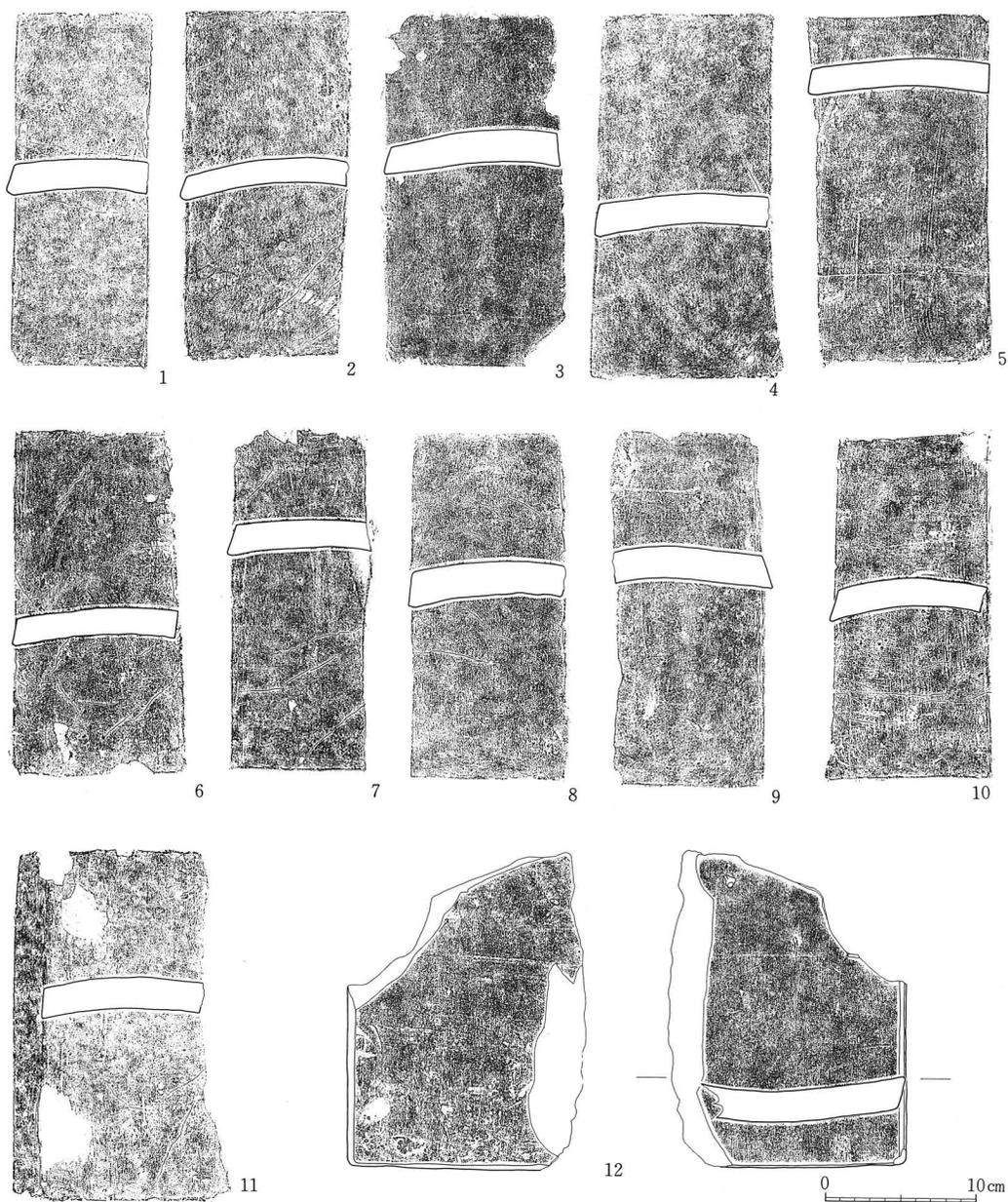
塀瓦

開山堂跡の南面する縁付近とSK02土壌から出土した。

G-1、5 (第13図2、4) 片面のみ入念なナデ調整が施され、直径1.2cmの穴が穿たれている。

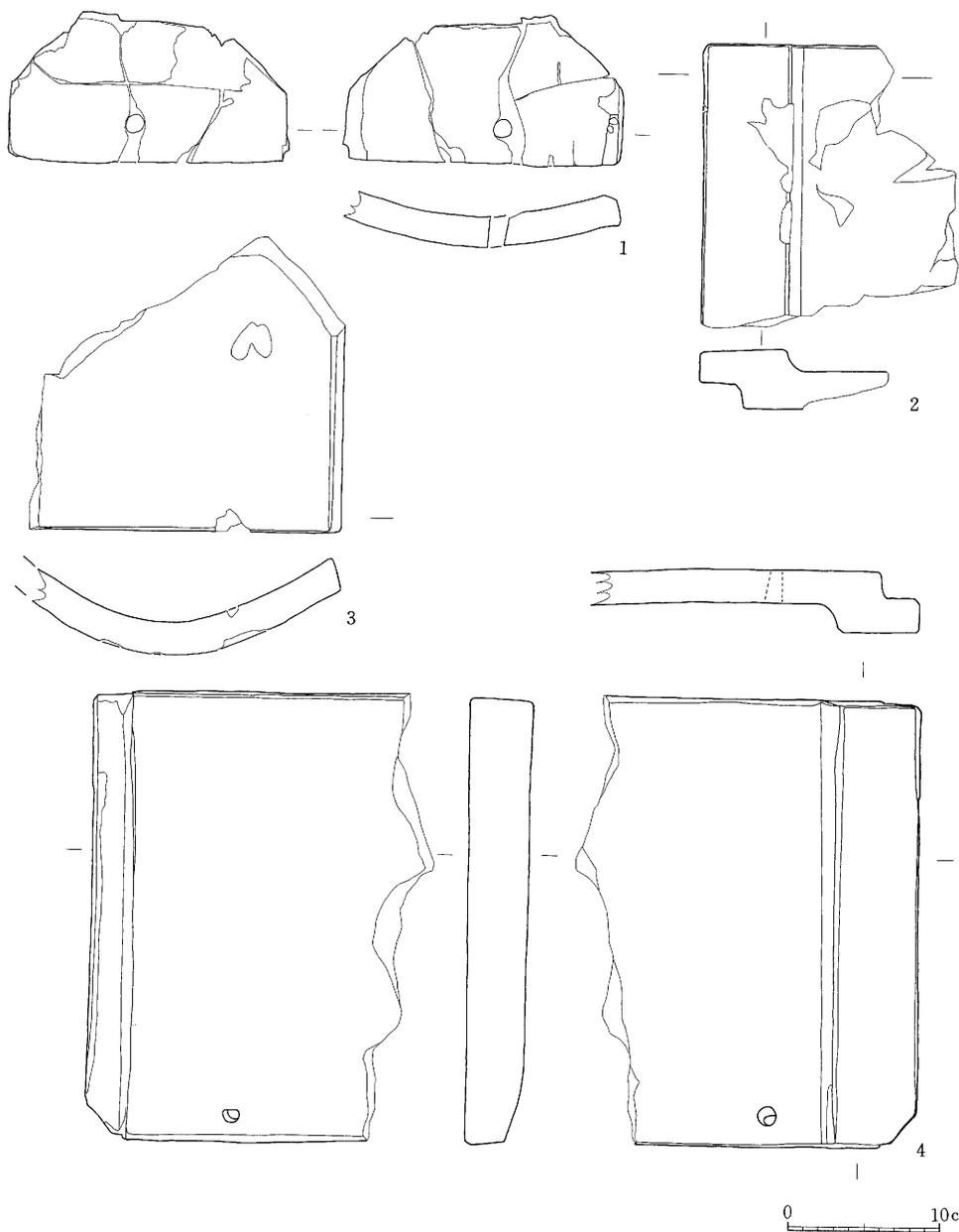
b. 陶磁器片

いずれも小片ではあるが、昇階段跡の斜面より磁器J-1碗(第16図7)、開山堂跡より磁器J-10碗(第16図9)、陶器I-8播鉢(第15図4)、上方の平場より陶器I-1碗(第15図3)が出土している。そのうち、J-10碗は13c～14c代の中国産青磁と考えられる。



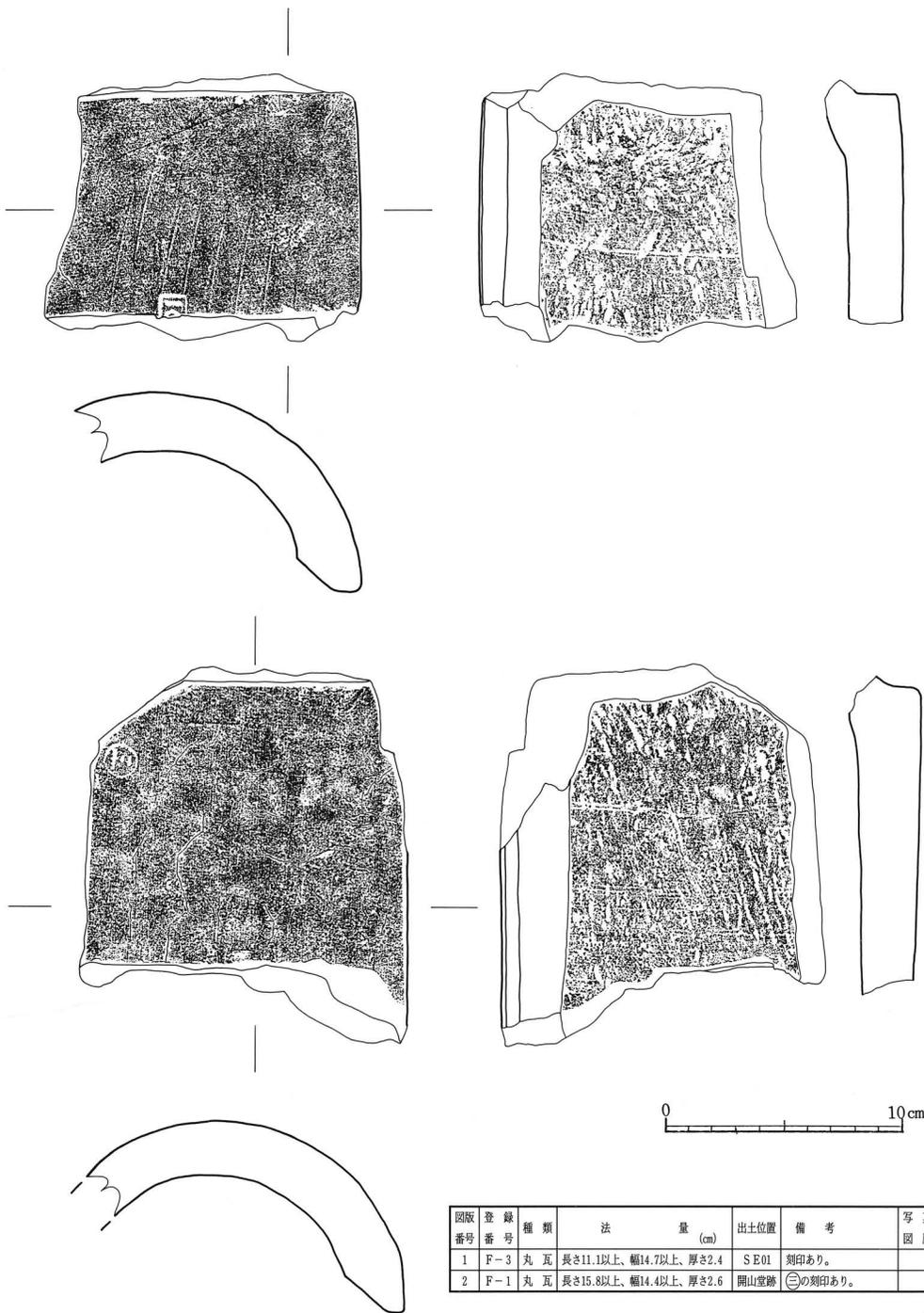
図版 番号	登 録 番 号	種 類	法 量 (cm)	出 土 位 置	備 考	写 真 版
1	G-17	斐斗瓦	長さ23.8、幅9.3、厚さ2.0	開山堂跡		
2	G-16	斐斗瓦	長さ23.3、幅10.6、厚さ1.5	開山堂跡		
3	G-15	斐斗瓦	長さ23.7、幅12.0、厚さ2.1	開山堂跡		
4	G-11	斐斗瓦	長さ24.5、幅11.6、厚さ1.8	開山堂跡上方平場		
5	G-10	斐斗瓦	長さ23.8、幅11.7、厚さ1.8	開山堂跡上方平場	凸面に強いナデ	
6	G-9	斐斗瓦	長さ23.4、幅11.0、厚さ1.9	開山堂跡		
7	G-8	斐斗瓦	長さ23.2、幅9.6、厚さ1.9	開山堂跡上方平場		
8	G-7	斐斗瓦	長さ23.4、幅10.5、厚さ2.2	開山堂跡上方平場		
9	G-6	斐斗瓦	長さ24.0、幅10.1、厚さ2.1	開山堂跡上方平場		
10	G-3	斐斗瓦	長さ23.2、幅10.2、厚さ1.8	開山堂跡上方平場		
11	G-19	斐斗瓦	長さ23.8、幅11.0、厚さ2.0	開山堂跡上方平場		
12	G-13	平瓦	長さ21.0以上、幅15.7以上、厚さ2.0	開山堂跡上方平場		

第12図 出土遺物 (1)



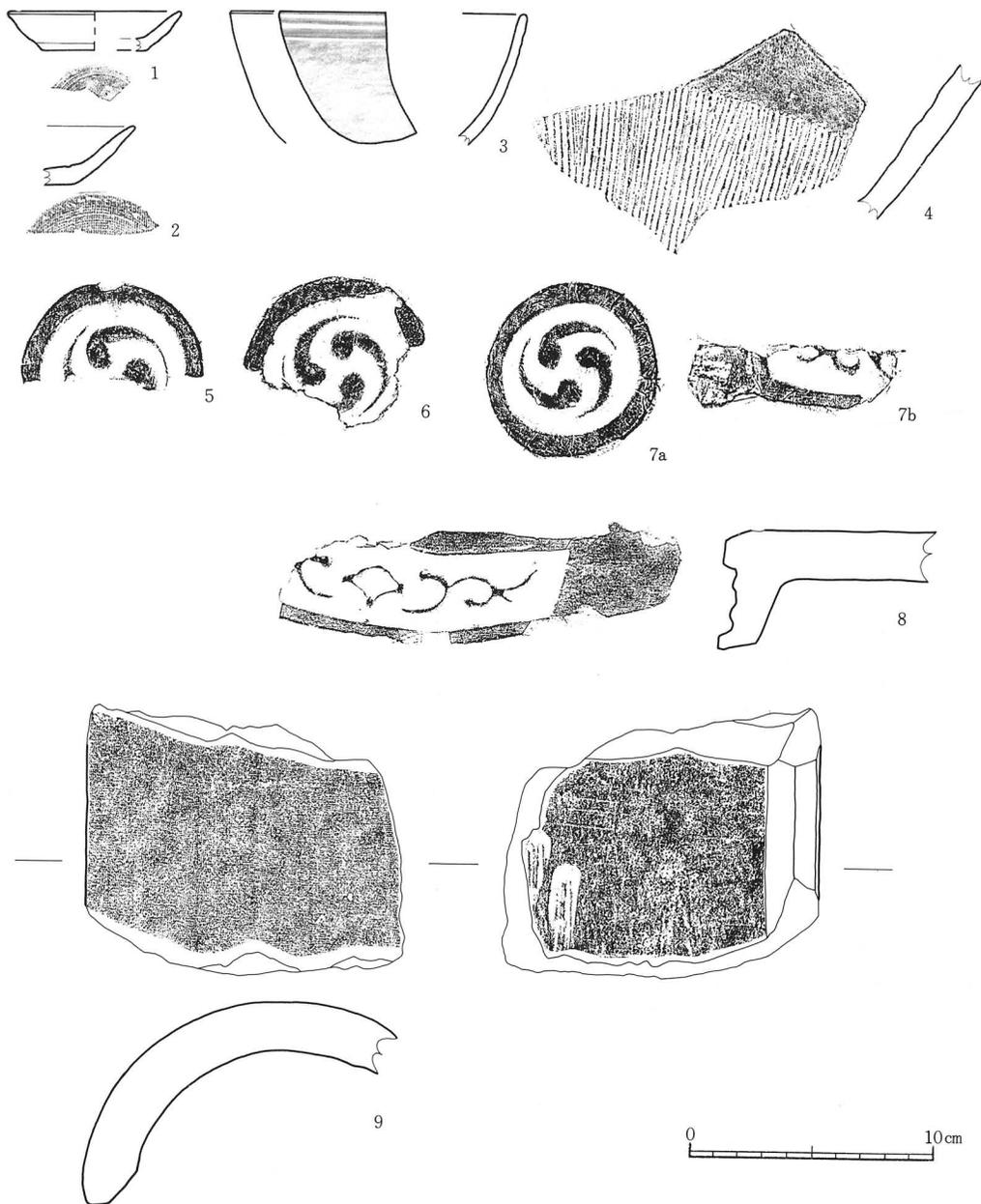
図版 番号	登録 番号	種類	法 量 (cm)	出土位置	備 考	写真 図版
1	G-18	平瓦	長さ9.9以上、幅18.1以上、厚さ2.0	開山堂跡	直径1.1cmの穴あり。	
2	G-1	塀瓦	長さ18.5以上、幅16.5以上、厚さ2.3	開山堂跡		
3	G-12	平瓦	長さ19.2以上、幅20.0以上、厚さ1.9	開山堂跡上方平場		
4	G-5	塀瓦	長さ29.2、幅22.4以上、厚さ2.1	S K 02	直径1.2cmの穴あり。	

第13図 出土遺物 (2)



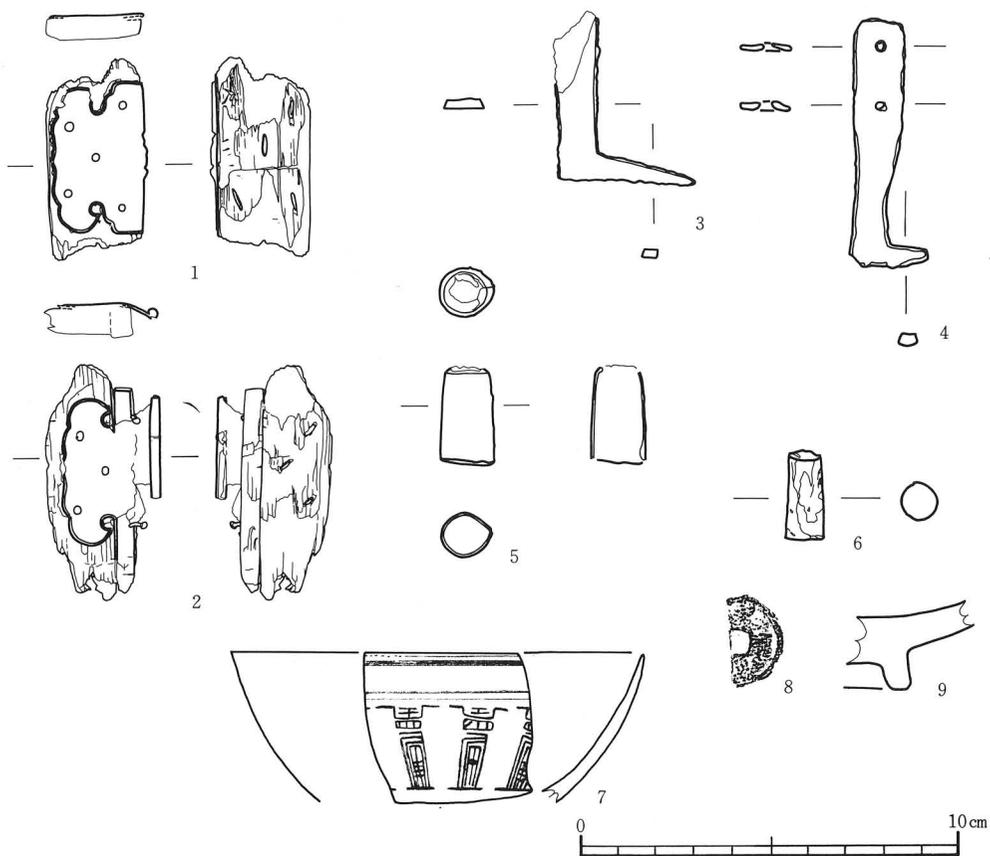
図版 番号	登録 番号	種類	法 量 (cm)	出土位置	備 考	写 真 図 版
1	F-3	丸瓦	長さ11.1以上、幅14.7以上、厚さ2.4	SE01	刻印あり。	
2	F-1	丸瓦	長さ15.8以上、幅14.4以上、厚さ2.6	開山堂跡	☉の刻印あり。	

第14図 出土遺物 (3)



図版 番号	登録 番号	種別	出土位置	量 (cm)	備考	写真 図版
1	D-2	土師質土器・坏	昇階段跡	口径7.1(推定)、器高1.6、底径4.3	内外面ともにロクロ調整、底部回転糸切り。内外面に煤が付着、灯明皿の可能性あり。	
2	D-3	土師質土器・坏	開山堂跡	口径12.0(推定)	内外面ともにロクロ調整。	
3	I-1	陶器・碗	上方平場	口径12.2(推定)	瀬戸・美濃、鉄釉。18世紀〜?。	13-12
4	I-8	陶器・揃鉢	開山堂跡		堤焼き。幕末〜明治。	
5	G-21	軒 棧 瓦	開山堂跡	小巴直径7.3	三ツ巴文	
6	G-4	軒 棧 瓦	開山堂跡	小巴直径7.4	三ツ巴文	
7	G-20	軒 棧 瓦	開山堂跡	小巴直径7.3	三ツ巴文	
8	G-14	軒 棧 瓦	開山堂跡	長さ 9.8以上、幅17.5以上、厚さ2.0	唐草文	
9	F-2	丸 瓦	S E 01	長さ10.9以上、幅14.3以上、厚さ2.2		

第15図 開山堂跡出土遺物 (4)



図版 番号	登 番 号	録 号	種 別	出土位置	法 量	備 考	写 真 版
1	N-1 a		金属製品 飾り金具	開山堂跡	長さ3.9cm、幅2.4cm	木片に付いている。蝶番いの可能性あり。	13-1
2	N-1 b		金属製品 飾り金具	開山堂跡	長さ3.8cm、幅2.5cm	同上	13-5
3	N-23		金属製品 金具	開山堂跡	長さ4.4cm、幅1.0cm 厚さ0.2cm	一端がL字状に2.6cm程曲っている。鉄製。	13-15
4	N-19		金属製品 金具	開山堂跡	長さ6.5cm、幅1.3cm 厚さ0.3cm	一端がL字型に1.0cm程曲がっている。上部には直径2mm程の 小穴が縦に2つ開いている。鉄製。	13-18
5	N-2		金属製品 金具	開山堂跡	長さ2.4cm、幅1.1cm 厚さ0.1cm	円筒型。用途は不明。	
6	P-1		土製品 不明	開山堂跡	長さ2.2cm、直径0.8cm(上部) 直径1.1cm(下部)	円柱型で瓦の胎土と似ている。	
7	J-1		磁器・碗	昇階段跡	口径10.9cm(推定)	肥前染付、18~19世紀。	13-6
8	N-20		古銭	開山堂跡	直径2.4cm	永楽通宝。明初鑄年代1408年、真書、破損。	
9	J-10		磁器・碗	開山堂跡		中国産青磁、龍泉窯系。13~14世紀。加熱を受けた痕跡あり。	

第16図 出土遺物(5)



番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	備考
1	N9W2	4.5	5.0	1.6	40	安山石	両面に墨書あり。表は「有」「如(又は如)」。ウラは「題」「詒」。一字目は「謁」二字目は「證」?
2	開山堂	6.0	12.3	2.4	166.0	安山石	片面に墨書あり。上段は「子」。下段左字は「問」又は「問」? 右字は「守」「子」?
3	開山堂	12.1	4.7	3.3	374.0	安山石	片面に墨書あり。一字目は「詞」「訪」「訪」。三字目は「詞」?

第17図 出土遺物(6)

c. 金属製品

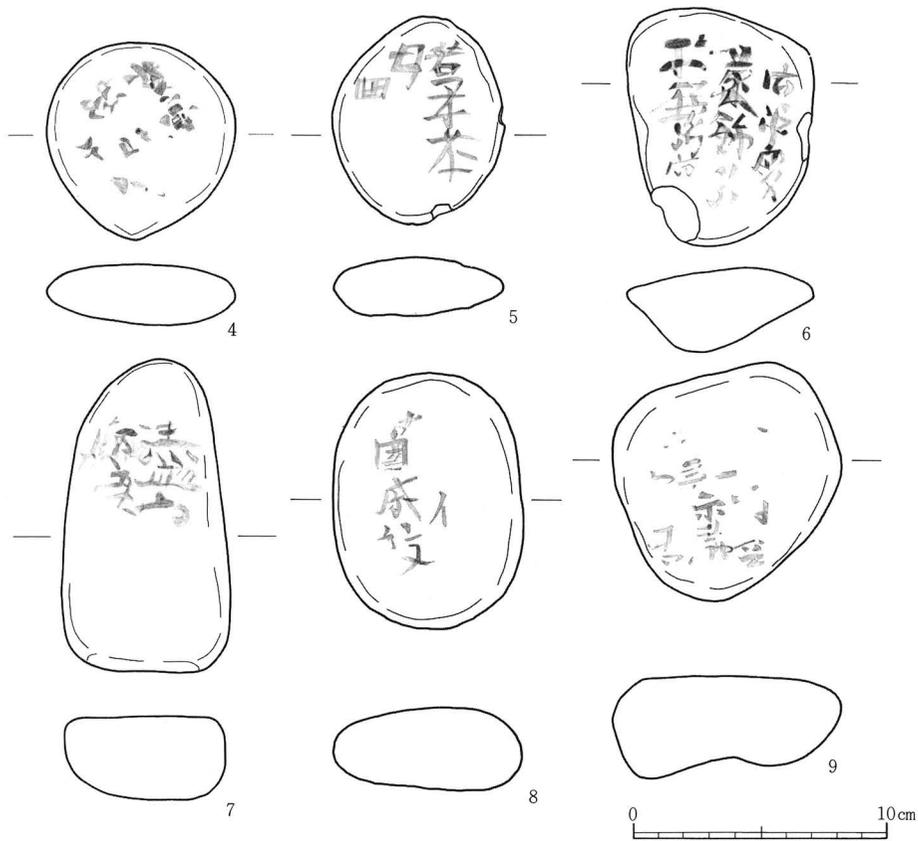
金属製品は金具や古銭(第16図)が出土している。これら開山堂の建築用品並びに装飾金具と考えられる。また、古銭N-20永楽通宝が1点(第16図8)が出土している。

d. 墨書痕跡のある根石

礎石の下部に敷かれた根石の中に墨書痕跡のあるものが9点(第18図1~6、第17図1~3)出土している。これらの墨書は1点(第17図1)を除いて明瞭ではなく、判読することができなかった。

e. その他

その他の出土遺物としては、土師器質土器(第15図1、2)と土製品(第16図6)、石器(第6図)がある。



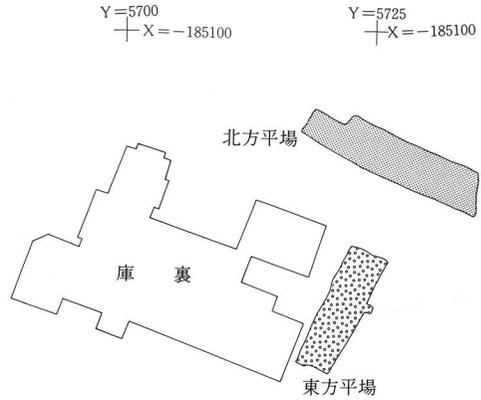
番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	備	考
4	開山堂	7.0	7.5	2.3	205.0	安山石	片面に墨痕あるが判読できない。	
5	N10W4	8.2	7.0	2.4	199.5	安山石	両面に墨書あり。表右方二字目は「干」「平」? 三字目は「本」?	
6	N10W6	9.5	7.2	2.7	324.0	安山石	片面に墨書あり。三行8~9字にわたると思われる。左列一字目が「二」「干」?	
7	N4W2	12.5	6.5	3.3	502.0	安山石	片面に墨書あり。一字目は「盡(又は[盡])」? 一字目左側は別字?	
8	N10W6	10.2	7.3	3.2	396.5	安山石	両面に墨書あり。表の左方一字目は「西」「苗」? 二字目は「成」? 三字目は「改」?	
9	N10W6	8.7	8.7	3.8	524.5	安山石	片面に墨痕あり。	

第18図 出土遺物(7)

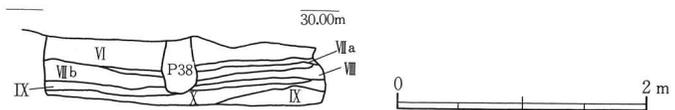
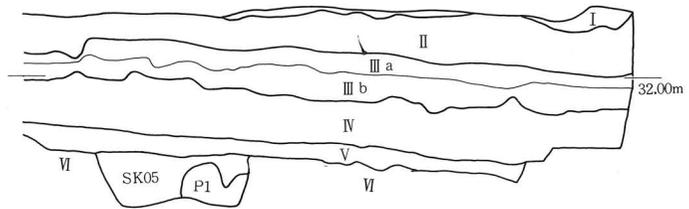
V. 庫裏東方平場の調査

1 基本層序

- I 層 10Y R3/3暗褐色、砂質シルト。現表土。
- II 層 10Y R6/6明黄褐色、砂質シルト。現在の庫裏を建てる為の盛土。
- III a 層 10Y R3/2黒褐色、砂質シルト。炭化物と少量の酸化鉄を含む。焼成した庫裏が建っていたときの旧表土。
- III b 層 10Y R2/3暗褐色、砂質シルト。炭化物を少量含む。
- IV 層 10Y R3/4暗褐色、粘土質シルト。5mm～5cm位の基盤岩片を多量に含む。江戸時代に庫裏造営の為に行った盛土。
- V 層 10Y R3/3暗褐色、シルト質砂質。少量の炭化物と焼土を含み、5mm～2cm位の基盤岩片を含む。焼失した庫裏造営以前の旧表土。
- IV 層 10Y R3/4暗褐色、粘土質シルト。遺構検出面。
- VII a 層 2.5Y R6/3にぶい黄褐色、砂。目の荒い砂。焼失した庫裏造営以前の整地層。
- VII b 層 10Y R4/3にぶい黄褐色、シルト質砂質。VII a 層の砂を一部含み、炭化物を少量含む。
- VIII 層 10Y R5/3にぶい黄褐色、砂。炭化物を少量含む。
- IX 層 2.5Y 4/2暗灰黄色、砂。炭化物を多量に含む。
- X 層 10Y R4/2灰黄褐色、粘土質シルト。炭化物を少量含む。
- XI 層 10Y R4/3にぶい黄褐色、シルト質砂。



第19図 調査区位置図



第20図 調査区北壁断面図

5 mm～2 cm位の基盤岩片を含む。

以上のようにI層からXI層まで大別できる。I層は現在の表土である。II層は、昭和18年の庫裏焼失以降の盛土（第3次整地層）である。III層は、庫裏焼失以前の旧表土である。III a層については、炭化物を多量に含んでおり、火災の痕跡と考えられる。IV層は、江戸時代における庫裏構築時の盛土（第2次整地層）と考えられる。V層は、江戸時代の庫裏構築以前の旧表土である。さらに下層のVII層も盛土された土層（第1次整地層）と考えられる。

2 検出遺構

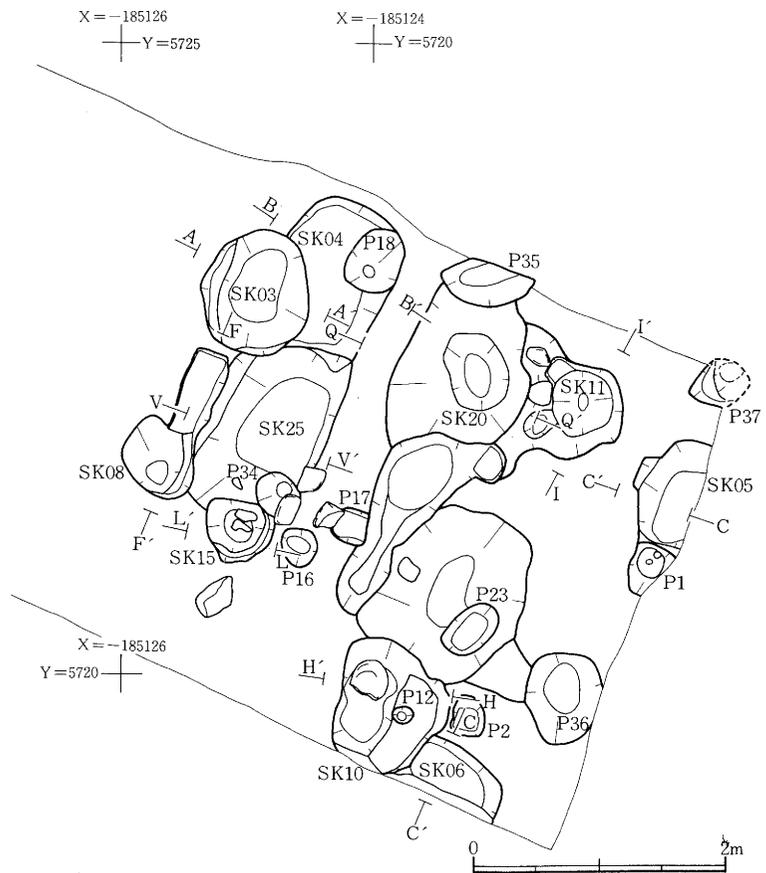
VI層の上面で土坑25基、ピット30、性格不明遺構1基を検出している。土坑25基（第4表参照）のうちSK04、14、20、21、25、26の土坑の6基は、壁が強く焼けていたり、堆積土中に焼土や炭化物を多量に含んでいるものである。SK04土坑は堆積土の上層から下層まで、均質に焼土を含んでいるものである。SK14土坑は底面が強く焼けており、堆積土中にも焼土を含んでいる。SK20、21土坑は、堆積土がきわめて強く焼けているものである。SK21土坑からは、古銭N-8（第26図9）が出土している。SK25土坑は、堆積土の第2層のみが焼土の層で、強く焼けている。

堆積土の上面で骨片

（註4）が出土している。

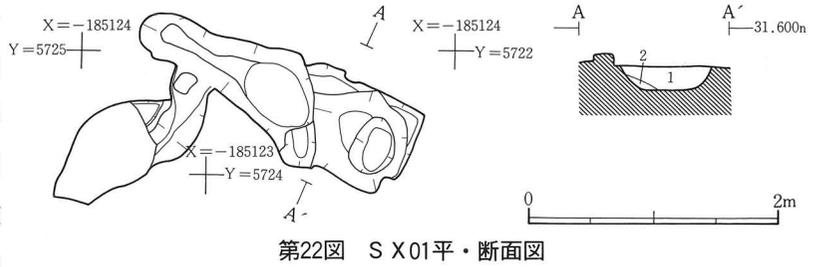
SK26土坑は、SK09、21土坑に切られているため残存状況は良好でないが、堆積土の上層から下層まで焼土を含んでいる。

SX01性格不明遺構（第22図）は、平面形が屈曲した溝状で、東西240cm、南北185cm、深さ42cm～49cmである。堆積土は2層からなり第1層は黒褐色の砂で、焼土粒、炭化物、シルトを含んでいる。第2層は暗灰黄の砂



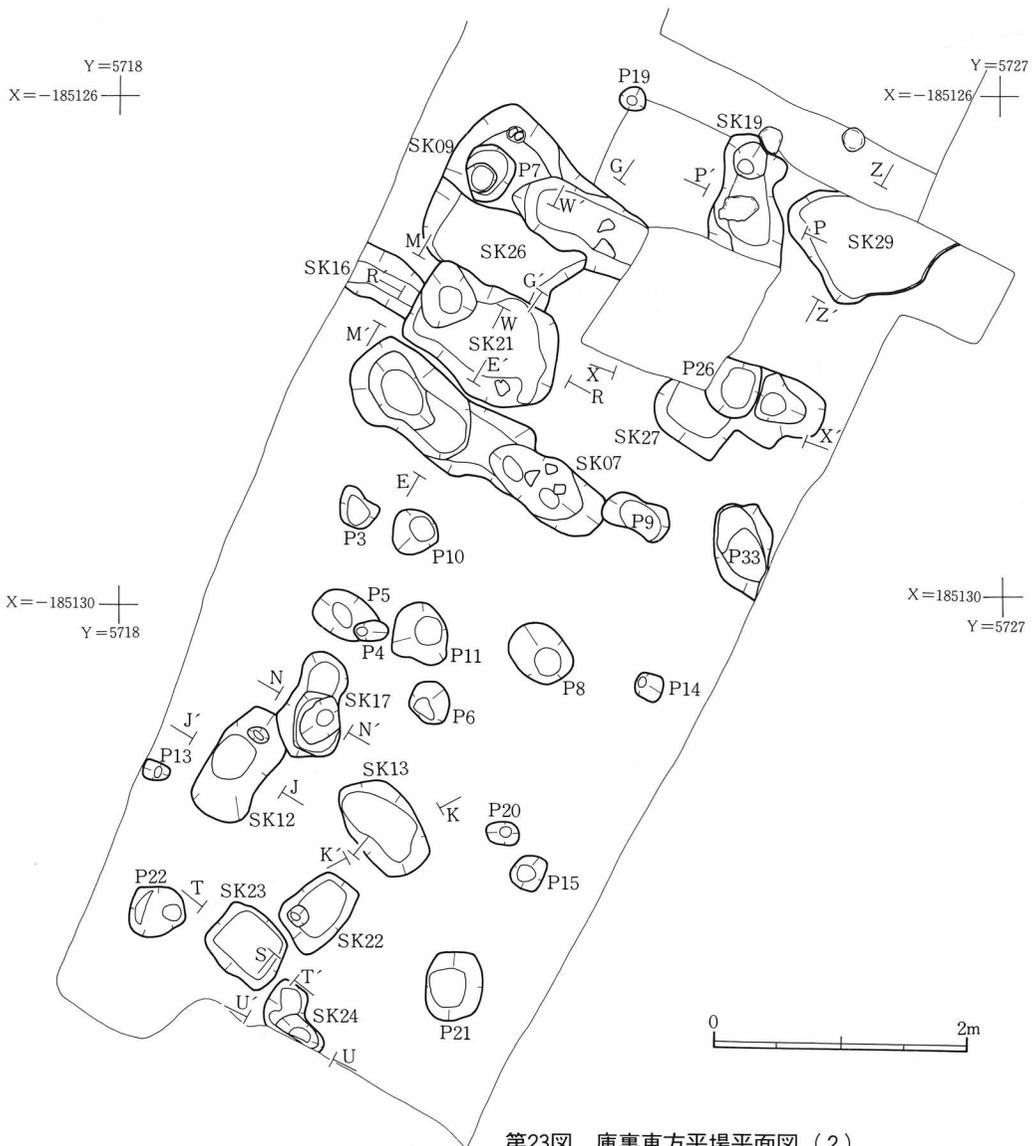
第21図 庫裏東方平場平面図(1)

で、焼土、炭化物を少量含んでいる。堆積土中から縄文土器 A-1 鉢 (第27図 1)、陶器 I-2 碗 (第27図 3)、古銭

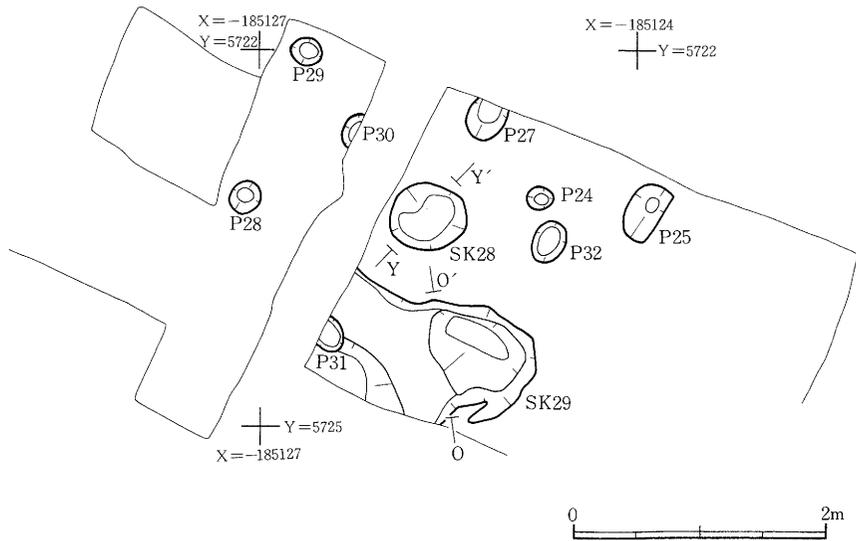


第22図 SX01平・断面図

N-6、7 (第26図、2、8) が出土している。これらの土坑を検出したVI層の上面からは、古銭や陶磁器の小片が出土している。



第23図 庫裏東方平場平面図 (2)

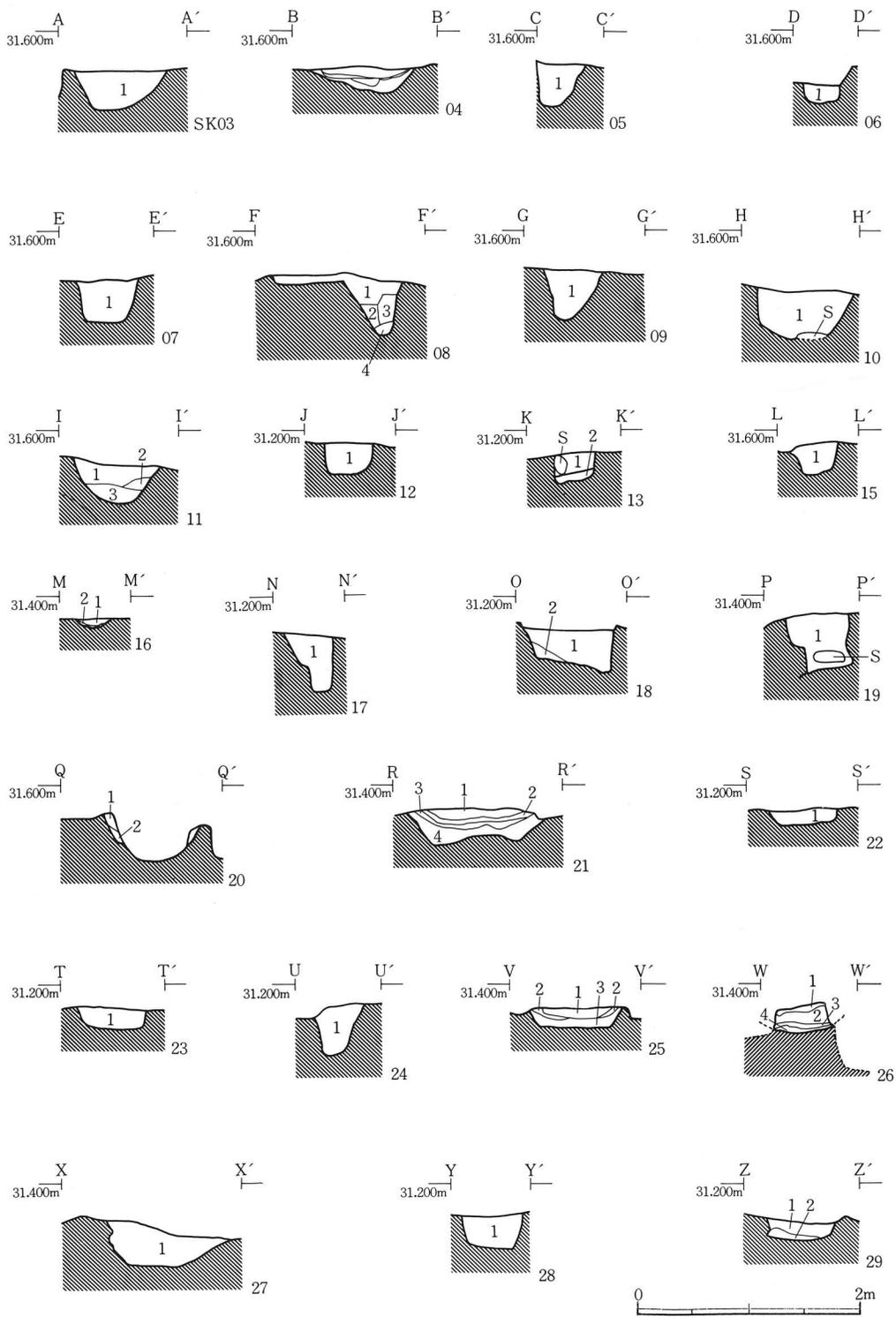


第24図 VIII層上面平面図

VI層の下層であるVIII層上面から、土坑2基、ピット8（第28図）を検出している。さらにVIII層中より陶器I-7碗（第27図6）、古銭N-18寛永通宝（第26図7）が出土している。

番号	土色	土性	備考	番号	土色	土性	備考
01	7.5Y R3/3暗褐色	砂	炭火物を少量含む	19	10Y R3/2黒褐色	粘土質シルト	焼土を多量に含む
02	10Y R3/2黒褐色	砂質シルト		20	10Y R3/2黒褐色	砂質シルト	炭火物を少量含む
03	10Y R3/2黒褐色	砂質シルト		21	10Y R3/3暗褐色	砂質シルト	小石を含む
04	10Y R3/3暗褐色	砂質シルト	炭火物を少量含む	22	2.5Y R3/2黒褐色	砂質シルト	炭火物を少量含む
05	10Y R3/3暗褐色	砂質シルト	黒っぽい土をブロック状に含む	23	10Y R2/3黒褐色	シルト質粘土	小石、焼土を含む
06	10Y R2/3黒褐色	砂質シルト	一部炭火物を少量含む	24	2.5Y R3/2黒褐色	砂質シルト	
07	10Y R3/4暗褐色	シルト質粘土	(SK09の中)	25	10Y R4/4褐色	粘土	焼土を含む(砂を含む)
09	2/3黒褐色	砂質シルト	炭火物をブロック状に少量含む	26	10Y R4/4褐色	粘土	炭火物を含む(砂を含む)
10	7.5Y R4/3褐色	砂質シルト	炭火物を少量含む	27	10Y R2/3黒褐色	砂質シルト	炭火物を含む
11	10Y R3/3暗褐色	砂質シルト	小石、炭火物を少量含む	29	10Y R3/3暗褐色	砂	炭火物を含む(粘土を含む)
12	10Y R3/2黒褐色	砂質シルト	一部焼土を含む	30	10Y R4/6褐色	砂	炭火物を少量含む
13	10Y R2/3黒褐色	シルト質粘土	炭火物を含む	31	10Y R2/3黒褐色	シルト質粘土	小石を少量含む
14	2.5Y R4/2暗灰褐色	砂	炭火物を少量含む	32	2.5Y3/2黒褐色	粘土	小石を含む(砂を含む)
15	10Y R3/3暗褐色	砂質シルト		33	10Y R3/4暗褐色	粘土	炭火物を少量含む(砂を含む)
16	10Y R3/3暗褐色	砂質シルト	炭火物をブロック状に含む	37	10Y R4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭火物をブロック状に含む
17	10Y R3/3暗褐色	砂質シルト	焼土、炭火物を含む	38	7.5Y R 褐色	粘土質シルト	
18	2.5Y R5/3黄褐色	砂質シルト	炭火物を少量含む				

第2表 ピット土層註記表



第25图 土坑断面图

番号	層位	土色	土性	粘性	しまり	備考
03	1	10Y R3/2 黒褐色	砂	無	やや有り	焼土粒と炭化物を含む(粘土質シルトを含む)
04	1	10Y R2/2 黒褐色	砂	やや有り	有	焼土と炭化物を含む(シルトを含む)
	2	10Y R3/1 黒褐色	粘土質シルト	有	やや有り	灰と土が混合している
	3	7.5Y R3/4 暗褐色	シルト	無	やや有り	焼土と炭化物を少量含む
	4	7.5Y R2/2 黒褐色	砂質シルト	無	やや有り	灰と土が混合している
05	1	10Y R3/2 黒褐色	砂質シルト	有	やや有り	炭化物を少量含む
06	1	10Y R2/3 黒褐色	砂質シルト	やや有り	やや有り	一部炭化物を少量含む
07	1	10Y R3/2 黒褐色	砂質シルト	やや有り	やや有り	一部炭化物を少量含む
08	1	10Y R2/2 黒褐色	砂質シルト	やや有り	やや有り	焼土を含む
	2	10Y R3/2 黒褐色	砂質シルト	有	やや有り	
	3	2.5Y R5/3 黒褐色	砂	やや有り	やや有り	焼土を一部含む
	4	2.5Y R5/3 黒褐色	砂質シルト	やや有り	やや有り	一部炭化物を少量含む
09	1	10Y R2/3 黒褐色	砂質シルト	有	有	一部炭化物を少量ブロック状に含む
10	1	10Y R2/2 黒褐色	砂質シルト	やや有り	やや有り	焼土を少量ブロック状に含む
11	1	10Y R4/3 におい黄褐色	粘土	有	やや有り	一部炭化物を少量含む(砂を含む)
	2	2.5Y 5/4 黄褐色	砂	無	無	一部粘土を含む
	3	10Y R4/3 におい黄褐色	粘土	有	やや有り	小石をブロック状に含む(砂を含む)
12	1	10Y R4/3 におい黄褐色	砂質シルト	やや有り	やや有り	炭化物、焼土をブロック状に含む
13	1	7.5Y R2/1 黒色	砂質シルト	やや有り	やや有り	焼土を含む
	2	10Y R5/3 におい黄褐色	砂	やや有り	無	小石を含む
14	1	5 Y R4/3 におい赤褐色	シルト質粘土	有	有	小石、炭化物を含む
	2	2.5Y R4/8 赤褐色	粘土質シルト	やや有り	有	焼土を含む
	3	5 Y 5/1 灰色	シルト質粘土	有	やや有り	炭化物、焼土をブロック状に含む
	4	2.5Y R2/3 極暗赤褐色	粘土質シルト	やや有り	有	径5mmほどの小石を含む
	5	10Y R1.7/1 黒色	砂	無	無	炭化物を含む
	6	10Y R5/3 におい黄褐色	砂	無	無	
	a	5 Y R3/6 暗赤褐色	粘土質シルト	有	有	焼土、礫を含む
	b	10Y R5/6 黄褐色	粘土質シルト	有	有	焼土を含む
15	1	10Y R2/3 黒褐色	砂	無	有	焼土粒と炭化物を含む(シルトを含む)
16	1	10Y R2/3 黒褐色	粘土質シルト	やや有り	有	炭化物、小石を含む
	2	2.5Y 5/4 黄褐色	砂質シルト	やや有り	無	小石を少量含む
17	1	10Y R3/4 暗褐色	砂質シルト	やや有り	やや有り	炭化物を少量含む
18	1	10Y R2/3 黒褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物、酸化鉄をブロック状に含む
	2	2.5Y 4/3 オリーブ褐色	砂質シルト	無	やや有り	径10mmの基盤岩を少量含む
19	1	10Y R3/4 暗褐色	砂質シルト	やや有り	有	焼土、炭化物をブロック状に含む
20	1	5 Y R3/6 暗赤褐色	粘土質シルト	やや有り	有	焼土、礫を含む
	2	10Y R6/4 におい黄褐色	粘土質シルト	有	有	焼土を含む
	3	10Y R3/3 暗褐色	砂質シルト	無	やや有り	少量の炭化物を含む
21	1	7.5Y R5/6 明褐色	シルト質粘土	有	有	焼土、礫を含む
	2	5 Y 4/1 灰色	粘土質シルト	有	やや有り	焼土、礫を含む
	3	5 Y R3/4 暗赤褐色	粘土質シルト	やや有り	やや有り	焼土、灰、礫を多量に含む
	4	2.5Y 5/3 黄褐色	砂	無	やや有り	礫を含む
22	1	10Y R3/2 黒褐色	砂質シルト	無	やや有り	炭化物を少量含む
23	1	10Y R4/3 におい黄褐色	砂質シルト	やや有り	やや有り	炭化物を少量含む
24	1	10Y R2/3 黒褐色	砂質シルト	やや有り	有	酸化鉄、炭化物を少量含む
25	1	5 Y 4/1 灰色	粘土質シルト	有	有	焼土を含む
	2	7.5Y R5/6 明褐色	粘土質シルト	やや有り	有	焼土の堆積
	3	5 Y R3/1 黒褐色	砂質シルト	やや有り	やや有り	炭化物を含む
26	1	10Y R3/4 暗褐色	粘土質シルト	やや有り	有	焼土を多量に含む
	2	5 Y 4/1 灰色	粘土質シルト	やや有り	やや有り	焼土をブロック状に含む
	3	7.5Y R4/6 褐色	粘土質シルト	やや有り	やや有り	焼土をブロック状に含む
	4	10Y R5/6 黄褐色	砂質シルト	やや有り	無	小石を少量含む
27	1	10Y R3/3 暗褐色	粘土	有	やや有り	焼土、炭化物、小石を含む(砂を含む)
28	1	10Y R4/3 におい黄褐色	砂質シルト	無	やや有り	焼土をブロック状に含み、下層に炭化物を含む
29	1	10Y R2/3 黒褐色	粘土質シルト	やや有り	有	炭化物、焼土を少量含む
	2	2.5Y 5/3 黄褐色	砂	無	無	炭化物少量と小石を含む

第3表 土坑註記表

番号	規 模 (cm)			長 軸 方 向	平 面 型	出 土 遺 物	備 考
	長 軸	短 軸	深 さ				
03	79.0	88.0	37.9	N-64.5°-W	円 形	無	SK04、SK25を切っている
04	123.0以上	92.0	22.7	N-72.0°-W	隅丸方形	無	火葬痕跡有り、SK03に切られ、SK25を切っている
05	80.0	53.0以上	46.2	N-69.0°-W	隅丸方形	土師器、磁器片	
06	91.0	43.0以上	30.0	N-31.0°-E	隅丸方形	無	SK10に切られている。
07	212.0	40.0	53.5	N-55.0°-W	隅丸方形	無	底部に礫有り
08	122.0	28.5	56.8	N-60.0°-W	不 整 形	無	SK25を切っている
09	158.0以上	50.0	64.6	N-66.6°-W	不 整 形	陶器、磁器片	SK26を切っている、底部に礫有り
10	107.0	90.0	54.3	N-57.5°-W	不整円形	土師器片、すり鉢	SK06、SX01を切っている、底部に礫有り
11	85.0以上	75.0	50.0	N-79.0°-E	不 整 形	無	SK20、SX01を切っている
12	95.0	46.0	23.4	N- 4.5°-E	隅丸方形	無	SK17を切っている
13	82.0	50.0	31.0	N-30.0°-E	隅丸方形	無	北壁に礫有り
14	121.0以上	86.0	10.7	N-29.5°-W	不整円形	磁器片、砥石	火葬痕跡有り、SX01を切っている
15	56.0	46.0	39.4	N-47.5°-E	不整円形	無	SK25を切っている。底部より板碑K-4出土
16	72.0以上	38.0	10.8	N-59.5°-W	隅丸方形	釘、N-4 箸 (金属製品)	
17	84.0	39.0	64.0	N- 8.6°-E	隅丸方形	無	SK12に切られている
18	163.0以上	85.0以上	51.3	N-23.0°-E	不 整 形	無	
19	97.5以上	40.0	74.7	N- 2.5°-W	不 整 形	無	底部に礫有り
20	125.5以上	105.0以上	51.3	N-69.5°-W	不 整 形	無	火葬痕跡有り、SK11、SX01に切られている
21	130.5	77.0	24.2	N-52.0°-W	不整円形	古銭	火葬痕跡有り、SK16に切られ、SK26を切っている
22	61.5	44.5	28.2	N-46.0°-E	隅丸方形	無	検出上面に礫あり
23	61.0	52.5	21.7	N-47.0°-W	隅丸方形	無	
24	63.0以上	26.0以上	47.0	N-24.5°-W	不 整 形	無	
25	158.0	86.0	32.4	N-52.5°-W	隅丸方形	磁器片、骨片	火葬痕跡有り、SK03、04、08、15に切られている
26	129.0	52.0以上	28.7	N-52.0°-W	不 整 形	無	火葬痕跡有り、SK21、09に切られている
27	134.0	54.5	24.8	N-89.5°-W	不 整 形	無	
28	60.0	53.0	33.7	N-21.0°-E	円 形	無	
29	139.0以上	69.0	26.0	N-84.5°-W	不 整 形	陶器片	

第4表 土坑観察表

3 出土遺物

出土した遺物には、陶磁器片、古銭、煙管などの金属製品、その他に縄文土器、土師器質土器、石器がある。

a. 陶磁器

陶磁器は、33点出土しており、そのうち11点（第27図3～7、第26図11～15）を図化している。出土した陶磁器の産地は、肥前、古瀬戸、相馬などの国内産のほか、中国産のものも含ま

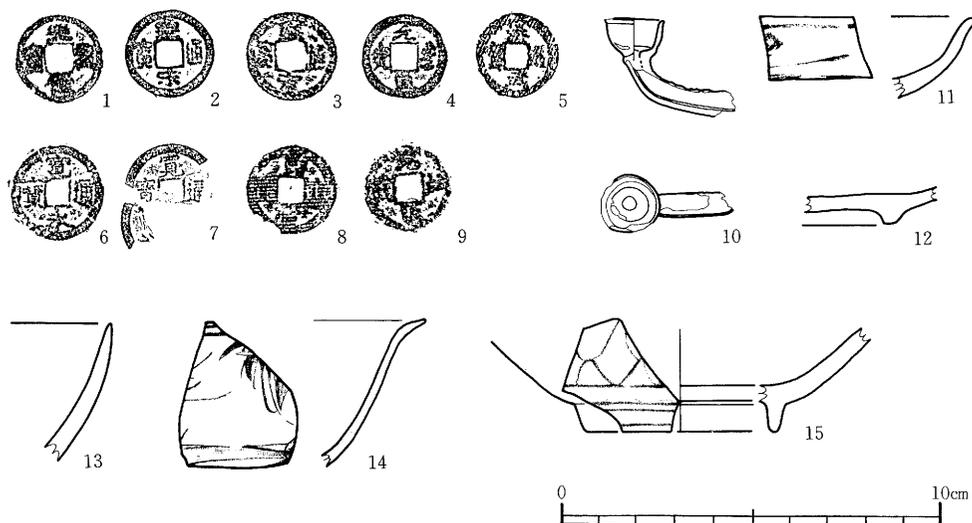
れているようである。陶器 I-7 碗（第27図6）は、13世紀から14世紀代の中国産の禾目天目茶碗である。割れた断面に漆が附着している。そのうちN-9 飾り金具は、VI層上面で出土している。

b. 金属製品

金属製品は、古銭9点（第26図1～9）、煙管1点（第26図10）、箸（第27図8）、飾り金具（写真図版13-2）が出土している。

c. その他

その他の出土遺物としては、土師器質土器1点（第27図10）、板碑片1点（第27図12）が出土している。



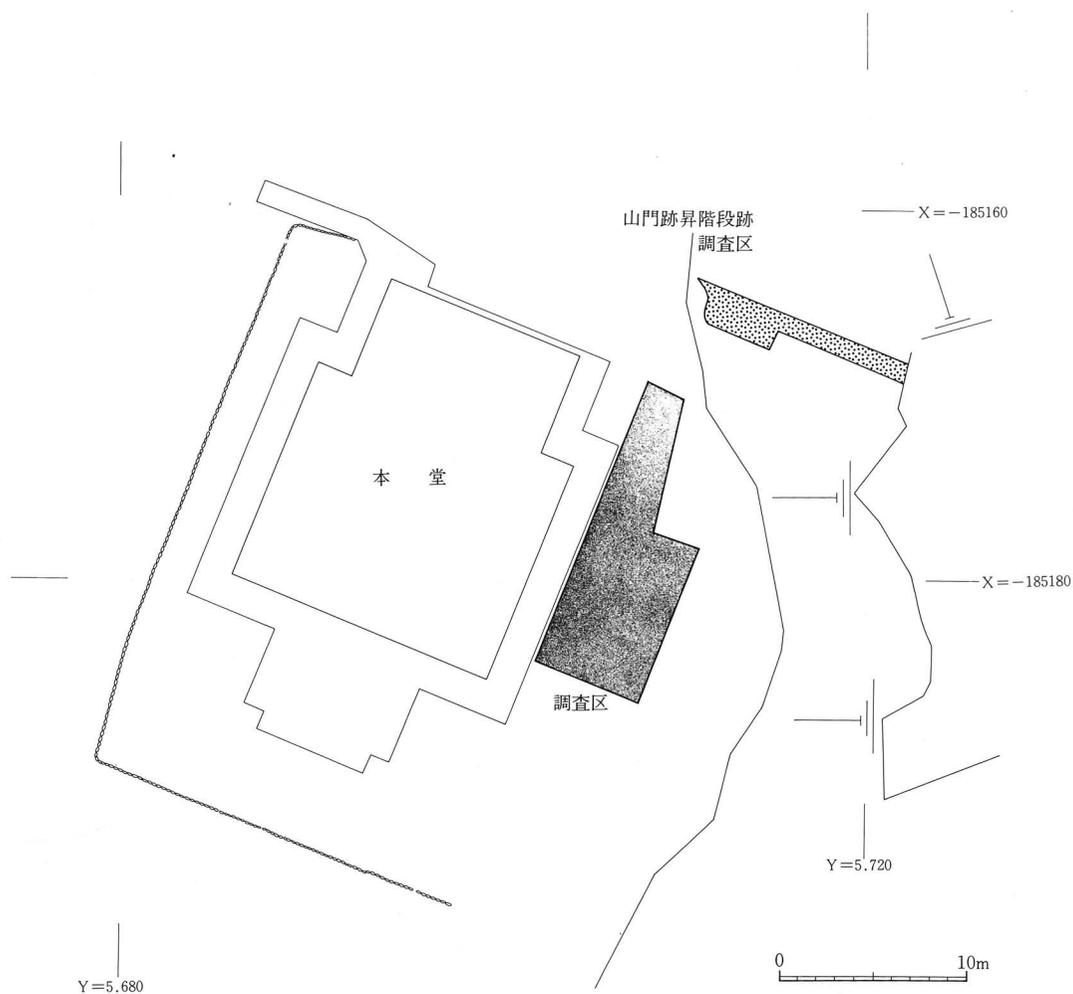
図版番号	登録番号	種別	出土位置	法量	備考	写真版
1	N-13	古銭	VI層上面	直径2.4cm	天聖元宝？、北宋初鑄年代1023年、篆書。	
2	N-6	古銭	S X 01	直径2.4cm	皇宋通宝、北宋初鑄年代1039年、真書。	
3	N-14	古銭	VI層上面	直径2.4cm	皇宋通宝、北宋初鑄年代1039年、真書。	
4	N-15	古銭	VI層上面	直径2.3cm	元豊通宝、北宋初鑄年代1078年、真書。	
5	N-12	古銭	VI層上面	直径2.2cm	洪武通宝、明初鑄年代1364年、真書。	
6	N-16	古銭	VI層上面	直径2.4cm	寛永通宝、初鑄年代不明、破損している。	
7	N-18	古銭	VIII層中	直径2.4cm（推定）	寛永通宝、初鑄年代1668年、新寛永、破損している。	
8	N-7	古銭	S X 01	直径2.4cm		
9	N-8	古銭	S K 21	直径2.4cm		
10	N-17	煙管	V層上面	長さ3.9cm、幅1.4cm 厚さ0.1cm	雁首部分	13-3
11	J-5	磁器・皿	VI層上面	口径13.4cm（推定）	肥前染付。	13-10
12	J-9	磁器・皿	VI層上面		染付、中国産16世紀後半～17世紀。	
13	J-6	磁器・碗	VI層上面		肥前染付、18世紀。	
14	J-3	磁器	VI層上面		端反りの染付皿か碗。中国産16世紀代？。加熱を受けた痕跡あり。	13-8
15	J-7	磁器・碗	VI層上面	底径5.6cm（推定） 高台底径5.1cm（推定）	肥前染付、17世紀後半。体部下反に網目文。	13-7

第26図 出土遺物（1）

VI. 仏殿跡・庫裏北方平場の調査（平成3年度の調査）

仏殿跡

本堂の東側を16×6 mの調査区を設定（第28図）して発掘調査を実施したが、遺構、遺物を検出することはできなかった。



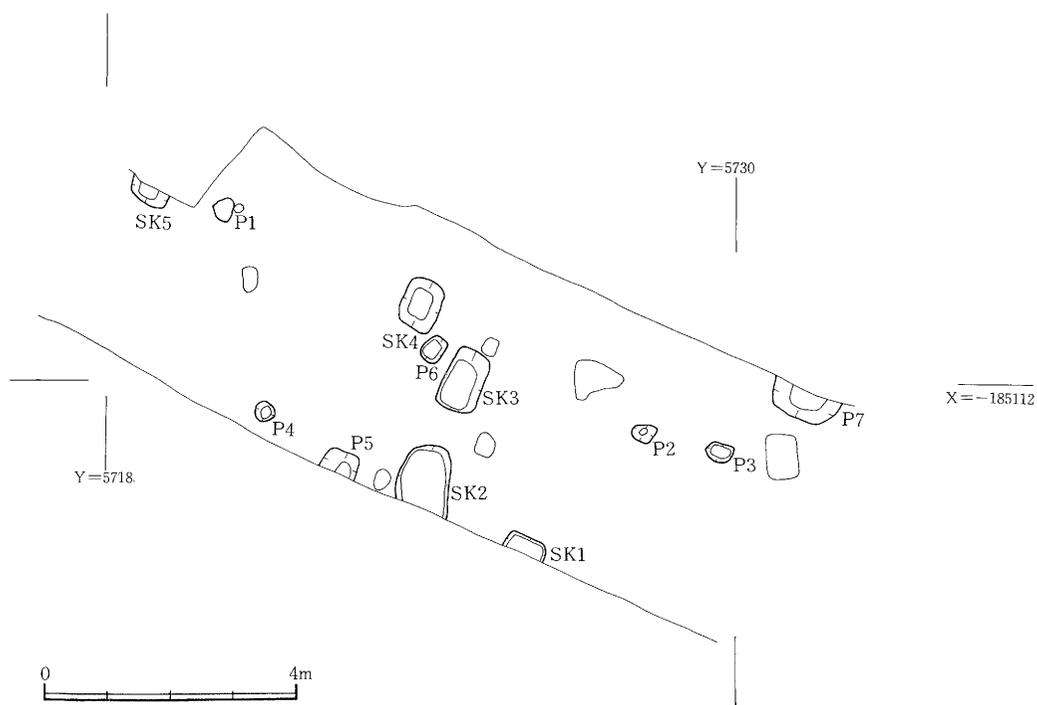
第28図 仏殿跡調査区位置図

庫裏北方平場（第19図参照）

基本層位はI層が現在の表土で、II層が砂の層である。このII層上面から土坑5基、ピット7個を検出している。

検出した土坑は、堆積土中に、炭化物を含んでいたが、東方平場で検出したような焼土や焼け面を伴う遺構ではなかった。また、検出したピットのうち、ピット1からは土師器片2点、ピット2からは陶器I-9（第27図10）、ピット3から土師器片1点が出土している。

この調査区南側に位置する東方平場との間には、参道が通っており、調査した地区の標高は東方平場よりも約80cm程高くなっている。また、北方平場と東方平場の基本層位には違いがあり、両調査区の層位を対応することは困難であった。



第29図 庫裏北方平場平面図

VII ま と め

1 開山堂跡を調査した結果、開山堂を構築するために旧地形を大きく変えていることが明らかとなった。調査区の東側の斜面を削平し、標高の低い西側の斜面に盛り土をして平坦な平場を造成している。さらに礎石を据えるための据え方を掘り、根石を敷いて礎石を設置している。盛り土された上面に設置された礎石はやや大きく、削平により基盤の岩が露出している上面の礎石は小さい。また最も外側を廻る礎石は、内側の礎石より小さく厚さも薄いことから縁や下屋の部分に使用されていたものと考えられる。

出土した遺物のなかで開山堂の年代を検討しえるものとしては、開山堂跡より上方の平場から出土した瓦類がある。すべて燻瓦で炭化物とともに出土していることから、開山堂の焼失時にまとめて廃棄されたものと考えられる(註5)。そのうち熨斗瓦は焼成前に分割線を入れ割られているものである。このような瓦は仙台城三の丸跡、利府町大沢窯跡で出土している。とくに大沢窯跡では瓦の生産年代を松島瑞巖寺の瓦の検討から慶安三年(1650年)前後としている。ただ本遺跡の場合は同じ開山堂跡から熨斗瓦とともに軒棧瓦が(註6)出土している点で年代的には後出のものと考えられる。

県内でこのような寺院に関連した礎石建物跡の調査例としては、花山村花山寺跡、大和町信楽寺跡、白石市堂田遺跡、仙台市御堂平遺跡、仙台市堂庭廃寺跡がある。また現存のものとしては、角田市高蔵寺阿弥陀堂がある。しかしこれら建物は信楽寺跡を除いては平安から中世末とされるものであり、江戸時代の寺院建築に比べ規模や伽藍配置の点で大きくことなっている。信楽寺跡については礎石建物跡とその後方に池が存在する点で洞雲寺と類似するが、建物と池の同時性や年代の決定についてさらに検討が必要と考えられる。

開山堂を含め洞雲寺の諸建築については、昭和14年仙台高等工業学校の小倉強氏の詳細な調査(註7)がある。それによれば開山堂は「単層、素木造、入母屋造、茅葺、梁間三十七尺五寸、桁行三十四尺三寸、背面に下屋を付す、用材は杉とす。三方に勾欄付椽をまわし階段を付す。三面は開放して紙障子をたてる……………屋根は茅葺にて箱棟瓦葺とす。……………奥に仏壇を設け……………木像を安置し、……………」となっている。そして第31図のような平面図を残し、寺の記録により安永四年(1775)に建てられたことを紹介している。

今回の発掘調査で得られた成果と矛盾する点はないと考えられるが、建てられた年代については紀年名のある棟札や瓦の出土がなかったため、これ以上検証することは出来なかった。

- 2 山門跡・昇階段跡からは礎石と石積みを検出した。位置関係からこれらの遺構が山門と昇階段の接続部分(第32図↓)の可能性がある。しかし調査した範囲が狭小だったのと周辺の地形が大きく削平されているため、詳細を明らかにすることは出来なかった。
- 3 庫裏東方平場の第VI層上面で土坑を27基検出し、調査区北半に集中している。土坑のうちS K04、14、20、21、25、26土坑の6基は壁や堆積土中に焼面、焼土が見られるものである。古銭や煙管のほかにS K25土坑から骨片が出土していることから、火葬と関わりある遺構と考えられる。



第30図 山門跡平面図 (1/60)

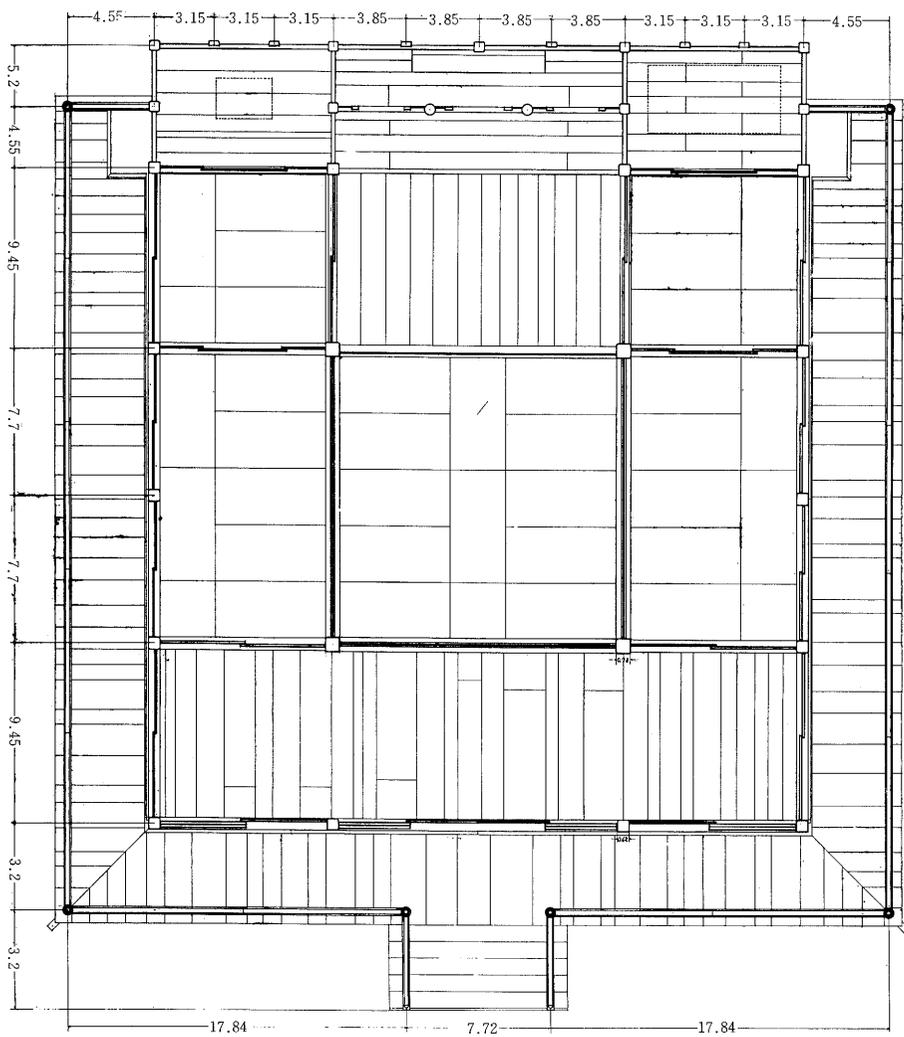
- 火葬のあり方は大きく2つに分けられ、1 茶毘所(火葬場)で火葬した後に別の場所に埋葬する、2 茶毘所と埋葬場所が同一である、の場合があるという(註8)。本遺跡の場合は出土した骨片が1点であり、土坑から出土した遺物も少ないことから、火葬のみ行い埋葬は別箇所で行なわれた可能性が高いと考えられる。したがってこれらの土坑は火葬にのみ使われた遺構と考えられる。
- 4 出土した遺物のうち陶磁器片については18世紀以降のものが多いが、13世紀から14世紀代の中国産禾目天目茶碗や16世紀から17世紀代の中国産染付けの磁器片、15世紀以降と考えられる国内産天目茶碗など遺物もあり、中世にさかのぼる遺構が周辺に存在した可能性を示唆するものとして注目される。
- 5 墨書痕跡のある根石については1点を除いて判読することは出来なかった。また部分的に判読可能なものを含めても金剛経、観音経の中には該当する文字を見つけることは出来なかった。

洞雲寺山寺

開山堂

平面圖
縮尺貳拾分之壹

建築學科第一學年
昭和十四年七月實測



洞雲寺山寺
開山堂
建築學科第一學年
昭和十四年七月實測

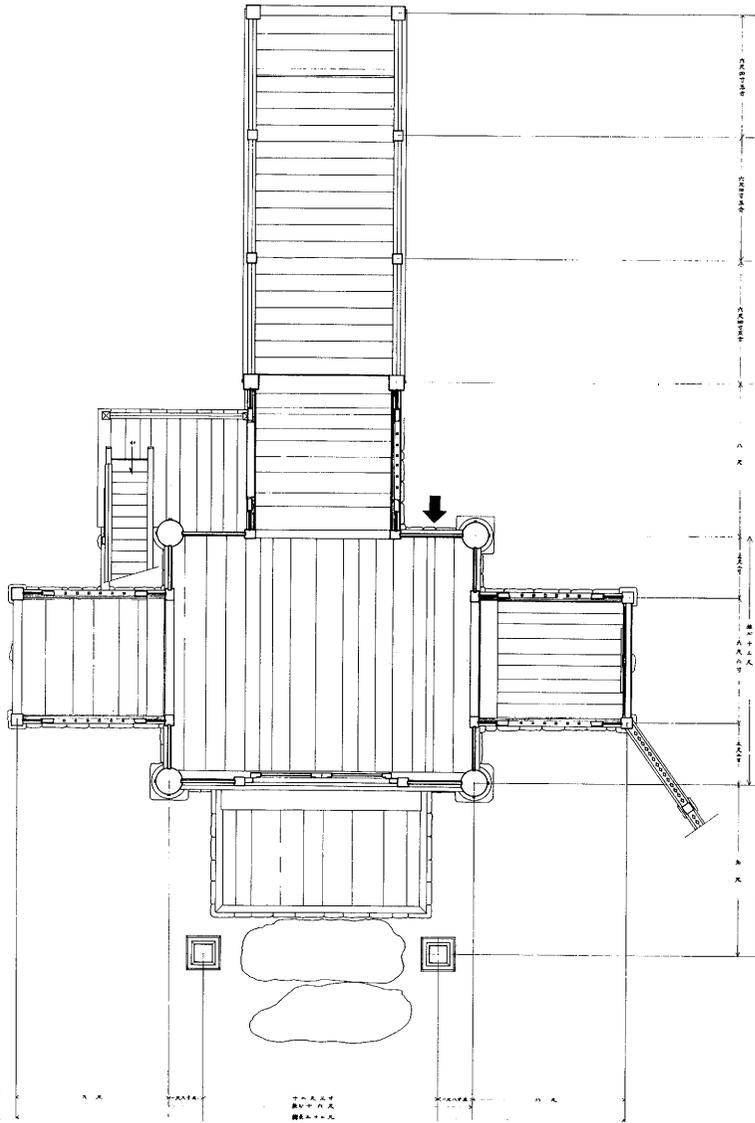
第31圖 開山堂平面圖 (東北大学工学部建築学科藏) (單位：尺)

洞雲寺山寺 山門

壹階平面圖 縮尺貳拾分之壹

建築學科第一學年
昭和十四年七月實測

仙台高等美術學校
建築學科第一學年
實測作品



第32図 山門・昇階段平面圖 (東北大学工学部建築学科蔵)

註

- 註1 宮城縣史蹟名勝天然記念物調査報告書 第13輯
史蹟 七北田山寺洞雲寺建築調査報告書
小倉 強 (1940.9)
また、この他に仙台郷土研究第14巻 第6號(1944.6)に抄録されている。
- 註2 岩山寺と称される山形県立石寺とならび洞雲寺は砂山寺と呼ばれていた。また滋賀県石山寺と合わせ「三
大山寺」と言われている。
- 註3 棟札や寺の記録とされるものは現在は失われている。
- 註4 東北大学歯学部教授菊地正嘉氏より、成人の左側腓骨の骨幹部の可能性が高いとの御教示をいただいた。
- 註5 開山堂は記録によると茅葺であるが、棟や下屋に瓦の葺かれていた可能性がある。
- 註6 図解 技術の考古学 潮見 浩(1988.4) これによれば延宝2年(1674)近江三井寺の瓦工西村半衛によ
り工夫されたものとされている。
- 註7 註1に同じ
- 註8 宮城県教育委員会 東北自動車道遺跡報告書V 宮城県文化財調査報告書第81集(1981.6)日光山遺跡
P323~324

参考文献

- 仙台市教育委員会 仙台市文化財調査報告書第76集 「仙台城三ノ丸跡」 1985
- 仙台市教育委員会 仙台市文化財調査報告書第58集 「今泉城跡」 1983
- 仙台市教育委員会 仙台市文化財パンフレット第20集 「泉の文化財」 1990
- 仙台市教育委員会 仙台市文化財パンフレット第28集 「仙台の遺跡」 1992
- 仙台市教育委員会 仙台市文化財調査報告書第51集 「仙台市文化財分布地図」 1983
- 名取市教育委員会 名取市文化財調査報告書第22集 「大門山遺跡」 1988
- 白石市教育委員会 白石市文化財調査報告書第9集 「堂田遺跡」 1971
- 大和町教育委員会 埋蔵文化財調査報告書 「宮城県黒川郡大和町宮床信楽寺調査報告書」 1972
- 泉町教育委員会 「宮城県宮城郡泉町 堂庭廃寺宝塔跡発掘調査報告」 1969
- 花山村教育委員会 「花山村跡」 1979
- 宮城県教育委員会 宮城県文化財調査報告書第3集 「高蔵寺阿弥陀堂跡」 1958
- 宮城県教育委員会 宮城県文化財調査報告書第81集 「日光山遺跡」 東北自動車道遺跡報告書V 1981
- 宮城県教育委員会 宮城県文化財調査報告書第116集 「碓沢・大沢窯業跡ほか」 1987
- 盛岡市教育委員会 「盛岡城跡」 -昭和61・62年発掘調査概報- 1988
- 小倉 強 「実測図 仙台及び近郊の古建築」 北匠会 1973
- 西 和夫 「図解 古建築入門 日本建築はどう造られているか」 彰国社 1990
- 鈴木 充 「江戸建築」 日本の美術2 No201 至文堂 1983
- 岩本繁次 「社寺建築構造」 上巻、下巻 須原屋書店 1929、1930
- 井上新太郎 「本瓦葺の技術」 彰国社 1974
- 駒井綱之助 「かわら日本史」 雄山閣 1981
- 元興寺文化財研究所 「中・近世瓦の研究」 元興寺篇 1982
- 河北新報社 宮城県百科事典 1982

写 真 图 版



上 図版1 開山堂跡（東より）

下 図版2 開山堂跡（南より）



図版3 山門跡・昇階段跡



図版4
山門石積み跡



図版5 SK01土坑



図版6 開山堂上方平場瓦出土状況



図版7 SE01井戸跡



上 図版8 庫裏東方平場遺構検出状況南側（東より）
下 図版9 〃 〃 〃 北側（東より）

図版10
庫裏東方平場
S K 03土坑断面
(東より)

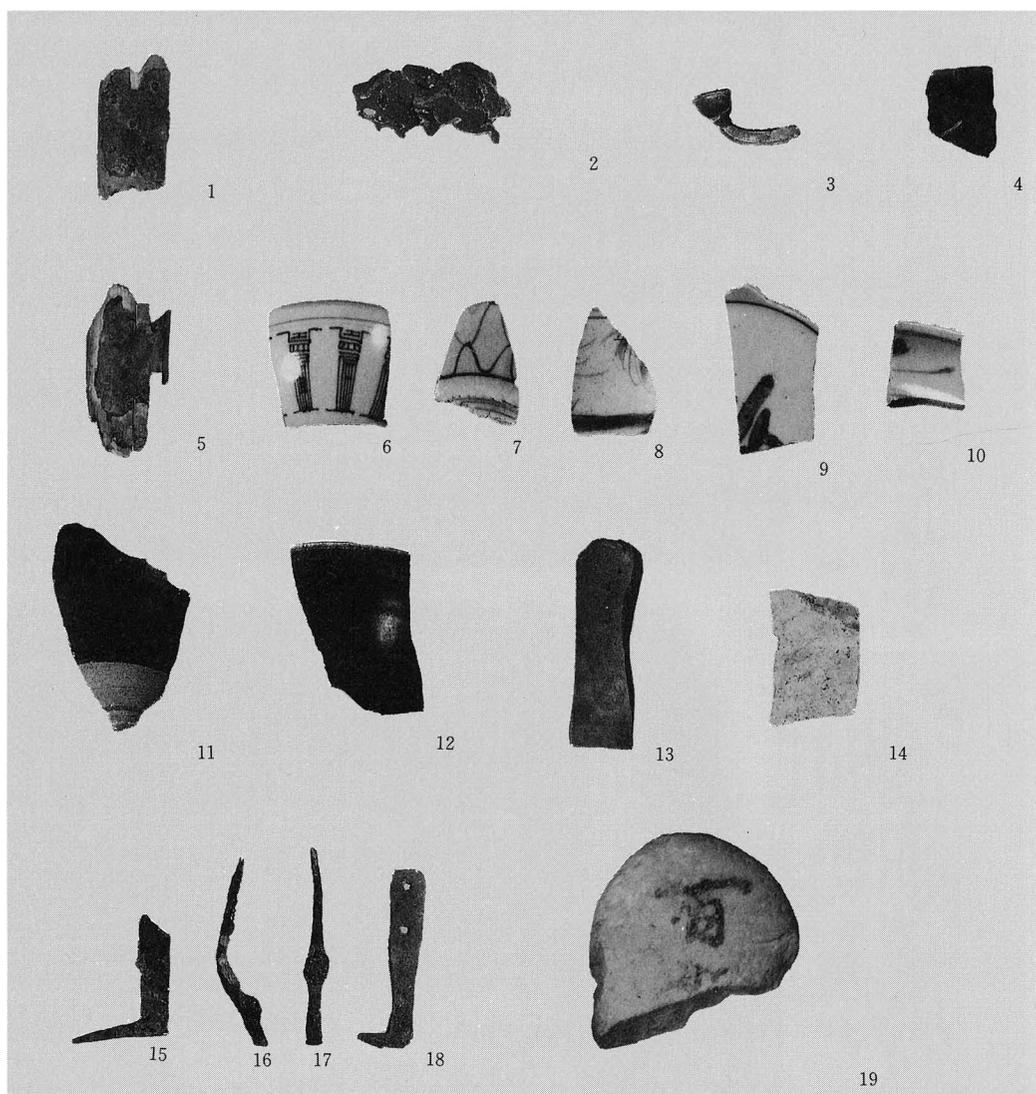


図版11
庫裏東方平場
S K 15土坑
(南より)



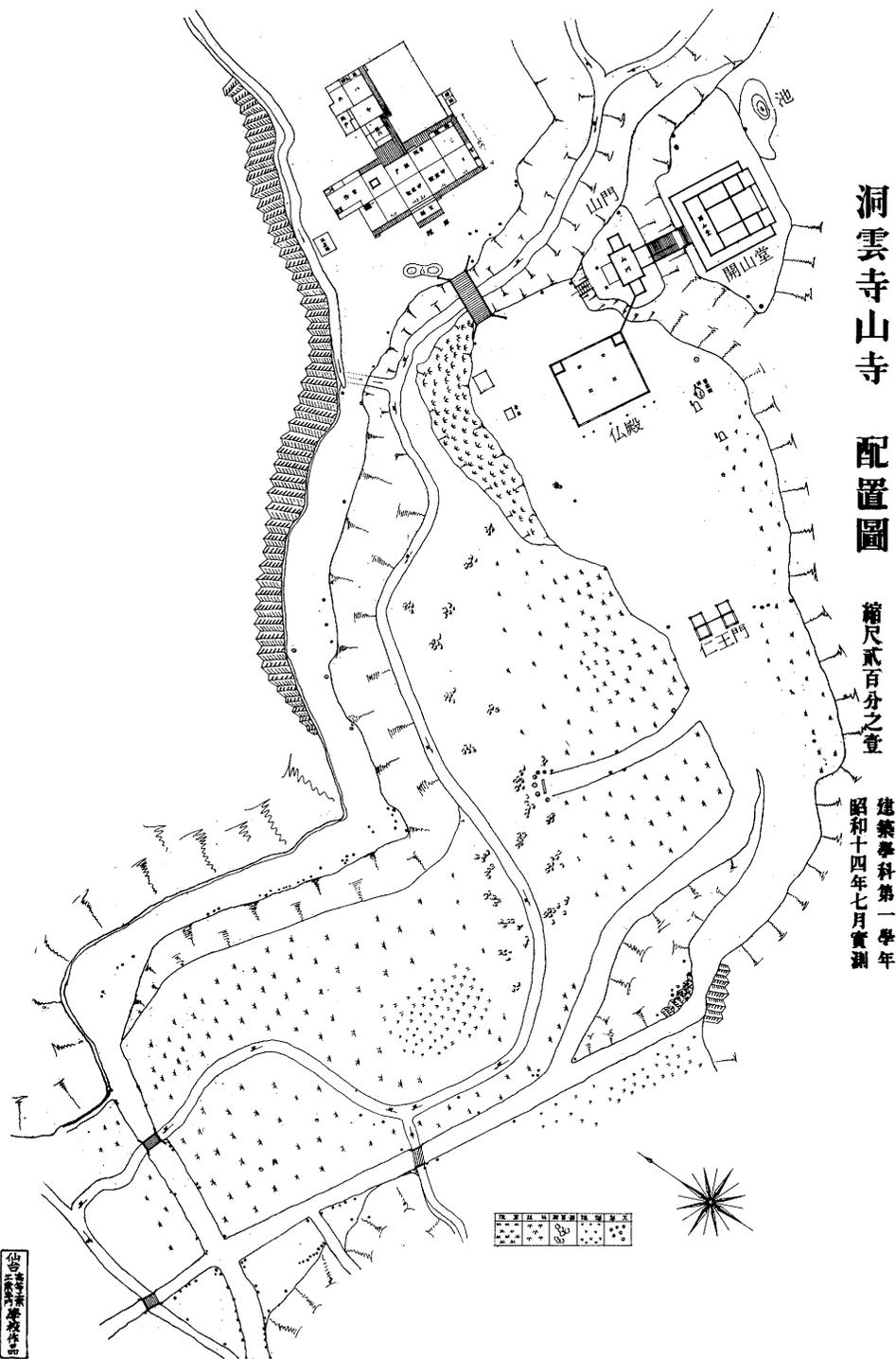
図版12
庫裏東方平場
S K 25土坑断面図
(東より)



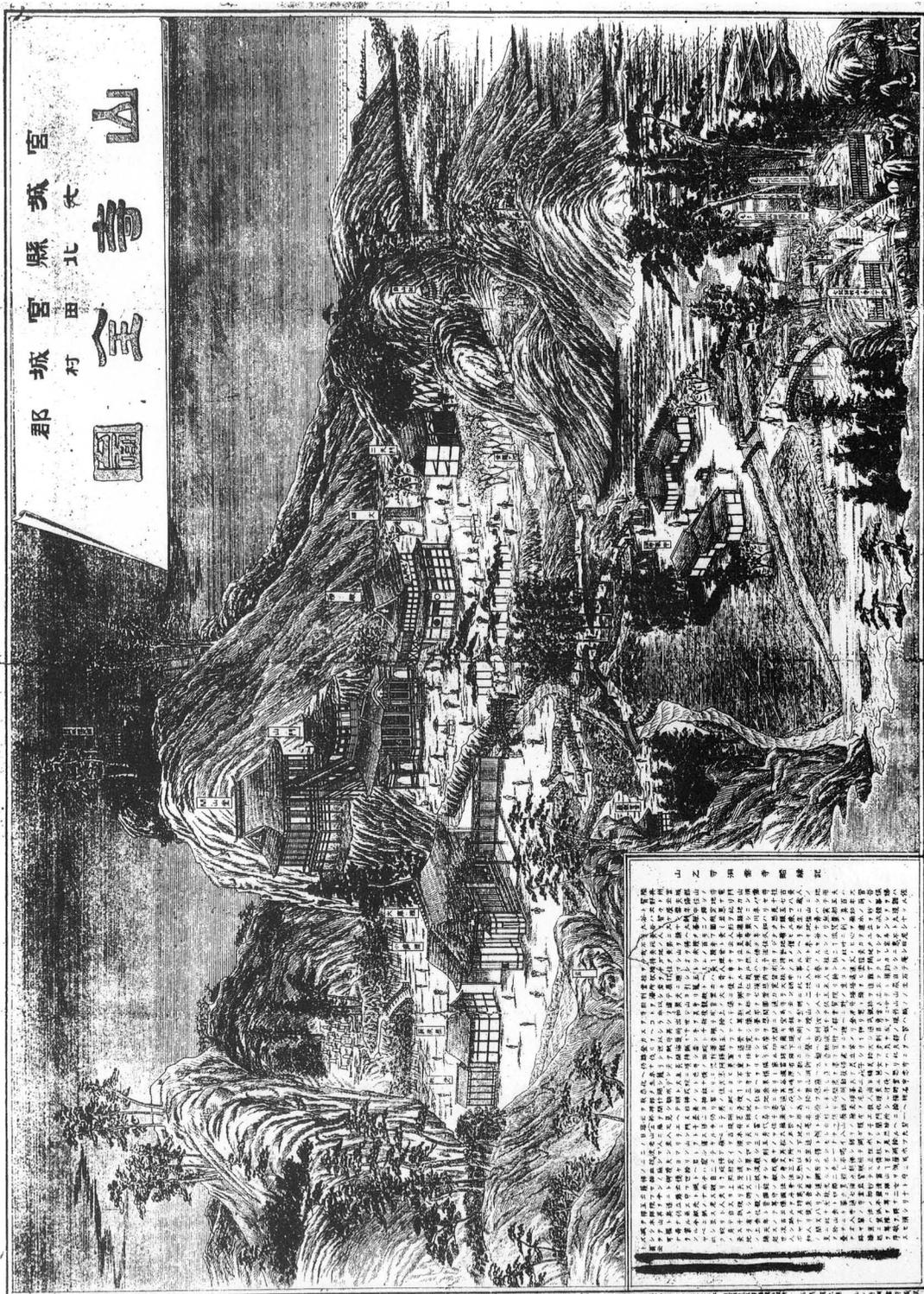


- | | |
|--------------|-------------------|
| 1. N-1a 飾り金具 | 11. I-7 陶器・碗 |
| 2. N-9 飾り金具 | 12. I-1 陶器・碗 |
| 3. N-17 煙管 | 13. K-1 砥石 |
| 4. I-2 陶器・碗 | 14. K-3 石器・スクレイパー |
| 5. N-1b 飾り金具 | 15. N-23 金具 |
| 6. J-1 磁器・碗 | 16. N-22 釘 |
| 7. J-7 磁器・碗 | 17. N-21 釘 |
| 8. J-3 磁器 | 18. N-19 金具 |
| 9. J-4 磁器・皿 | 19. K-8 根石 |
| 10. J-5 磁器・皿 | |

図版13 出土遺物



図版14 洞雲寺平面図—昭和14年当時— (東北大学工学部建築学科蔵)



図版15 洞雲寺全景(銅版画) —明治年間— (洞雲寺藏)

文化財課職員録

課長 白鳥良一		
管理係	調査第一係	調査第二係
係長 菅原澄雄	係長 加藤正範	係長 田中則和
主事 佐藤正幸	主任 結城慎一	教諭 太田昭夫
〃 高橋三也	〃 村上道子	主事 佐藤甲二
〃 庄子厚	教諭 佐藤好一	〃 渡部弘美
〃 佐藤寿江	主任 篠原信彦	〃 斎野裕彦
	〃 木村浩二	〃 荒井格
	〃 佐藤洋	〃 中富洋
	主事 吉岡恭平	〃 平間亮輔
	〃 金森安孝	教諭 五十嵐康洋
	教諭 小川淳一	〃 菅原裕樹
	主事 工藤哲司	主事 渡部紀
	〃 主浜光朗	教諭 熊谷裕行
	〃 長島栄一	
	〃 工藤信一郎	
	教諭 神成浩志	
	〃 竹田幸司	
	〃 稲葉俊一	
	主事 佐藤淳	
	教諭 川名秀一	

仙台市文化財調査報告書第175集

洞雲寺遺跡

1993年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町 3-7-1
仙台市教育委員会文化財課

印刷 (株) 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 263-1166

